愛知大学創成期からもう１つの原点を考察する

――それを生かせるかどうか［写真と資料で読む］――

越知　専

〈愛知大学写真研究会名誉会長、東亜同文書院大学記念センター客員研究員〉

司会：大島　大学に関する資料の公開と、その総合的研究というプロジェクトが、藤田佳久先生の主導のもとに補助金をいただいて始まり、2年少し経ってまいりました。その間いろいろな公開講演会、あるいは公開研究会なども行ない、またいろいろな地域でその貴重な資料を展示して公開してまいりましたが、その間に半面じっくりと内部で、あるいは外部の人も含めて基礎的な研究をやらないといけないということになりまして、ここ1年弱、私が世話させていただきまして小さな研究会（と言いましても今日はだいぶ大きくなったと思いますけれども、これはやっぱり越知さんの人徳のいたすところだと思います）を積み重ねてまいりました。本日はご案内のとおり、愛知大学創成期からもう1つの原点を考察する、それを生かせるかどうか、写真と資料で読むというテーマのもとに、私が同僚にしていただいているんですが、東亜同文書院大学記念センターの客員研究員であられます越知專さんにお話し願いたいと思います。その前にせっかくセンター長も来ておられますので、藤田先生から一言ご挨拶をお願いいたします。

挨拶：藤田　大島先生からお話がありましたが、東亜同文書院記念センターは今から15年程前にスタートしました。旧本館の下に今展示施設を設けてあり、それがスタートして10年ぐらいになります。書院だけでなく孫文関係の貴重な資料とかさまざまなものがございまして、そういうものを文科省のオープンリサーチプロジェクトに応募いたしましたら文科省側に選んでいただき、計5年間のオープンリサーチセンターのプロジェクトを進行することになりました。今年で3年目になりますが、この間1つは施設の大幅な改変・整備がありました。それと合わせて今大島先生がおっしゃったように、基本的な研究機能を充実させていくということがございました。そこで今日はそういう研究機能の一環として越知さんにお話をうかがうということです。越知さんはこのプロジェクトを立ち上げるに際しまして、サポーターとして上に出られる方はいないだろうということでご参加いただきました。予想どおりと言うか予想以上にサポートしていただきまして、今日も図がいっぱいありますので、またいろんな細かいお話がたくさん出てくるかと思います。こんな会を時々開いておりまして、それと大きくシンポジウムとか講演会とかも合わせて、実を言いますと今、大変忙しいんです。今日はそういう中の1つの研究会ということです。最近何か越知さんに構想がわきあがってきたようでして、今日はそんなお話がお聞かせ願えるんじゃないかと思います。ひとつご静聴いただければと思います。ということで私のご挨拶にさせていただきます。

Ⅰ　愛知大学の創成期

(1)　創成期に学んだ学生は今
――私の選んだ超著名人［愛大三本松］

越知　越知でございます。一昨日豊橋グランドホテルで産学官交流サロンがありました。その時に愛知大学の学長が講演をすることになっておりました。テーマは「愛知大学の将来について」。今日お話しするのも私としての１つの見方です。それと同時にその時に「わが国の農業と食糧自給率について」東海農政局の局長さんもお話をされました。同じテーブルの私の隣に田原の副市長さんが座っておられまして、５月15日、「愛知大学創成期からもう１つの原点を考案する」というテーマで話をすることを農政課の小川金一課長さんにも話したところ、「それを聞きに行ってもいいですか」と言われるものですから「どうぞどうぞ、研究会で十数人だけの研究発表みたいなものですがよろしかったら。特に田原の皆さんにはおそらく関係の深い話に最終点では合致すると思うので、ぜひおいでください」と返事をいたしました。また同時に今田原で農業大学院大学というのが準備をされており、その代表の方が石黒功さんという私の20年来の友達でございます。先だってもそのお話を聞きまして、社長室長の大橋進吉さんが今日お見えになっています。あとでいろいろとご質問なりしていただくと大変ありがたいと思います。

ところで「愛知大学創成期からもう１つの原点を考察する――それを生かせるかどうか［写真と資料で読む］」という題でありまして、皆さんにすると何だろうなとお思いでしょう。何だろうなという疑問符を持つところに私は研究の意味があると思います。けさ広辞苑をちょっとひもといてみました。「論文」というところを見ましたら、「論文とは議論をする文である」。研究の業績、あるいは結果を記すものが卒業論文であり修士論文であるが、ただ単に論文と言えば、論議をする文であれば論文だと。今日はだから皆さんとあとで論議をすればひいては１つの論文が作成されるわけで、皆さんも力になっていただきたいと思います。

今日はもっと気軽に話をしたいわけでありまして、今から55、6年前、と言うと生まれてない人が多いんじゃないかと思いますが、このように数人の研究会でケインズの「雇用・利子および貨幣の一般理論」について研究発表をしたことがあります。それを思い出しまして、55年前へトンネルを逆走して20歳の若さに返ったぐらいでやりますので、そういうふうにお願いしたいと思います。「はじめに」と書いてあるところでは、「愛知大学の名古屋笹島進出に伴う再編成に当たって、豊橋キャンパスの新学部はどうあるべきか。愛知大学の歴史を創成期から振り返りながら現在の世界的な環境問題、食糧問題も視野に入れて考察する」と。堅苦しい偉そうなことを書きましたけれども、学生時分はこんなふうに偉そうなことを言えば偉そうに見えると思ったのかも知れない。馬鹿にされてはいけないということで書いたのかも分かりません。第１編といたしまして「愛知大学創成期に学んだ学生は今」では、話がもっと具体的になります。私が独断と偏見でもって選んだ超著名人３人の愛大の３本松と、彼らが学んだ法経学部の15科目の教授陣とその講義内容について取り上げます。これをだいたい10～15分で終わるようにしたいと思います。

まず第１に私が選んだ３人と言うと、この３人です。ぜひ頭の中に入れておいてください。東松照明君。愛知大学の入口に看板が出ています。あるいは豊橋駅の構内に「未来を拓く大学」という東松氏が58年前に撮った写真があります。これはどういうものかと言うと、英字新聞を貫いた卵が日本の再生という意味を表している。それが彼の出世作になって、今や日本だけでなく世界の写真家になった。メトロポリタン美術館などで購入している。この写真が２年間で世界を駆け回って日本に帰ってくる。そういったことが読売や朝日の新聞紙上、NHKの日曜美術館でも数回紹介されている。彼の作品はこの大きさで１点60万円

が今世界の評価価格です。豊川の桜ヶ丘ミュージアムが８点買いました。去年豊川が買ったのは海軍工廠を写した写真です。爆撃の跡。銃弾の跡。防空壕の跡。そういうものを写した写真をぜひ欲しいと言って長崎まで豊川のミュージアムの学芸員が買いに行きました。それから一昨年の夏には愛知県美術館で東松照明写真展をやりましたが、同等の価格のものです。８年前に豊橋の美術博物館でやりましたがその時の倍の価格です。このくらい世界評価価格がどんどん上がっています。

では彼は愛知大学でどういうことをやっていたのか。東松君はどんなことを言っているか。大学で学んだことはどうだったのか。彼は昭和29年に愛知大学法経学部を卒業します。経済学科で学んだが一向に「経済的な仕事にならなかった」と言いますが、今ではネガから１枚焼くたびに剰余価値がどんどん出てるじゃないかと私は東松君を冷やかしているんです。注文があればネガからとる。剰余価値がいっぱい。彼は剰余価値を林要さんに学んだ。マルクス経済学の大家です。ケインズ経済学は小幡清金さんから学んだ。愛知大学の財政学の権威です。ところが財政学の権威であってもなかなか愛知大学の財政はその時分大変だった。

そういうようなことで東松君は今、世界で活躍している愛知大学卒業生の写真家の１人です。実は去年の10月に東松君から電話がありまして、「越知さん、僕の写真からカメラから雑誌からネガから全部を含めて、愛大を経由して名古屋市の美術館に寄贈してもいいんだけど、話をしてくれるか」。そういう話があった。私１人ではどうしようもないので、学長と副学長と事務局長とで、病気持ちの東松君１人だともしものことがあった時「いや、聞いてなかった」ということになるといけないから、奥さんと２人一緒に話をしますということになった。「じゃあよろしく頼む」と検討を始めたんですが、それが他へも伝わったのかどうか、名古屋市の美術館に話をしたところ、各地で「欲しい」「欲しい」という美術館が出まして、まさに今日の返事なんですが愛大だけでなく分散してくれと。やり方が遅かったのか、残念なんですが。その全ての世界評価額は100億円だそうです。名古屋市の美術館が100億のものをもらって収蔵して展示するというのに、まごついている間に今度は沖縄で、京都で、東京の写真美術館で、長崎で、「くれくれ」という話になっちゃって、困っているという返事が来た。

それでどうするか。愛知大学と美術館だけというわけにはいかず、分けなきゃならなくなったので、３千点ずつ分けると言う。１点60万円ですから３千点の写真は18億です。チャンスというものはすぐに生かさないと失う場合があるという１つの話をしまして、今から話すのも今回がチャンスだから愛大はしっかり頑張りましょうということを発表したいわけです。もう１つ苦い経験があるんです。愛知大学に、ここは本部ですが元公館の師団長官舎に師団長閣下がお住まいになっていた。そこを愛知万博の時に迎賓館にする、お金は僕がファンドを用意するという人が現れた。それで豊橋で「やらまい会」という会を数人で作った。豊橋市長も乗り気で現場を見に来て、「やりましょう」とゴーサインを出したところ、その方が急に亡くなられた。契約もしてないので、もう実現は不可能になった。それも残念だった。だから物事はスパスパッと決めないと行動を起こすことはできない。チャンスというのはパッと動かないと逃げられてしまう。そういうことを私は体験しております。

東日新聞 6月14日(水) ⑥

東松照明氏の原風景

県美術館で「愛知曼陀羅」

小学校時代の同級生と話す東松氏

テープカット

東松氏と握手する愛知県さん

写真展会場にて、豊橋良吉氏（東松照明事務所プロデューサー）

愛知大学 AICHI UNIVERSITY www.aichi-u.ac.jp/

愛知大学・愛知大学同窓会は、東松照明氏（愛知大学）の写真展「愛知曼陀羅」に特別協力しています。

東邦校舎 名古屋校舎 豊橋校舎

《9》 平成12年4月21日（金曜日） 東愛知新聞

愛知大学は成長の場

東松氏、展覧会にメッセージ

豊橋

内覧会で作品に見入る出席者＝豊橋市美術博物館で

「私の写真生活は、豊橋、愛知大学でスタートしました。愛知大学は私が成長した場所です」―東松氏のメッセージに大きな拍手が響いた。戦後日本を代表する写真家の一人であり、ゆかりの地・豊橋での初展覧会を開催します」と、それぞれ感想を語った。

東松氏は昭和五年、名古屋市生まれ。二十五年、愛知大学に入学し、写真部に入部。卒業後、岩波写真文庫のスタッフを経て、三十一年からフリーの写真家として活動。三十二年「地方の光と影」はじめ、一部は「民族」、三部「沖縄」、四部「長崎」、五部「三井三池」、六部「京」、七部「ニューワールド・マップ」、流星雨を撮影した新作を加えた六部「インターフェイス」で構成。同館一階三会場に分けて展示。

メッセージの一部はパネルで紹介され、内覧会で女性の一人は「絵の具でも描きたい」と感嘆した。

「生きてきた時代、生きざまを表せない、きれいさに感動しました」、男性は「生命は、東松氏の作品二百五十八点を六部構成で展示している。開場式に続く内覧会で、出席者は東松氏の五十年にわたる作品、制作活動の軌跡に見入った。

展覧会は、同大学時代の作品を含む第一部「戦後日本の光と影」はじめ、一部は「民族」、三部「沖縄」、四部「長崎」、五部「三井三池」、六部「京」、七部「ニューワールド・マップ」、流星雨を撮影した新作を加えた六部「インターフェイス」で構成。

（井上晴夫）

東松照明

昭和29（1954）年愛知大学法経学部経済学科卒業。「経済学科で学んだが、一向に経済的な仕事ではなかった」というが、今では「ネガ」からの剰余価値がどんどん生まれている。それらのすべてを含めて世界評価額「100億円」と言われている。彼の写真関係資料は、名古屋市美術館でも、「話が桁外れに大きすぎる」と戸惑う。愛知大学を通じて名古屋市美術館に寄贈を申し入れ、「東松照明写真資料館」でもできれば、愛知大学の誇りでもあり、世界の東松を名古屋の目玉とすることもできるだろう。

近年、長崎マンダラ、沖縄マンダラ、京マンダラ、愛知マンダラ、東京マンダラと写真展を開催していった。2007年11月の東京マンダラに合わせるように、エール大学の図録と写真200枚余が世界を２年間かけて１周し、日本に里帰りした写真展でもある。

愛知大学で学んだ経済学者の林要先生の経済原論や熊沢復六先生のロシア語・映画演劇論の影響で幅広く奥行きの深い作品を作り上げているのではないだろうか？

松浦元男さん *Motoo Matsuura*
1960年 法経学部卒　株式会社 樹研工業 社長

Voice from OB

安心と希望を抱ける、夢とロマンのある会社。

技術開発を続け、成長し続ける

平成19年度、「愛知ブランド企業」のひとつに認定された樹研工業。しかしそれ以前から、「世界最小・百万分の一グラムの歯車」製作で世界的に知られた存在でした。社長である松浦さんのユニークな経営学法はマスコミをはじめ多くの人々から注目を集めています。5年間のサラリーマン生活を経て松浦さんが設立した樹研工業は、「新試験入社、定年なし」で、やる気あふれる社員たちを育てつつ、すっと黒字経営を続けています。

「会社設立の1965年ごろは、日本が活気に満ち、燃えていた時代でしたが、間もなくオイルショックによる不況は日本を襲いました。しかし私は「不況は次の社会への活路を」という、大学時代に学んだ知識があったから冷静に構え、次代に備えた省エネ、省資源に努めました。そして「新技術の開発で目本経済は立ち直る」と信じて、マイクロパーツの開発に邁進したのです」。

生産技術と品質管理について他社に勝るとも劣らないシステムを作り上げていた樹研工業は、新規開発のために成型機までも自社で製作し、やがて極小精密部品では国内トップメーカーへと成長しました。

大学の勉強は、生涯の学びの入口

「品質管理、技術開発、財務管理が企業存続の鍵となる」と語る松浦さん。それに加えて「長い将来予測で、例えば今年度の株価動向を早くから予見するなど、経済評論家からも「目鼻がわるが在ですが、このペースとなったのは、愛知大学での学び」とおっしゃいます。

「私はアルバイト先のサポートを受けてジャズバンドで音楽をしながら大学に通っていまして、一単位が足りなくて卒業できないかも」と授で教室を間違えて受講した講義が、「平賀敦先生の経済学史」。ちょうど統計のアメリカ大恐慌を取り上げていたのですが、面白くて、講義が終わると先生のもとに行き、「どんな本を読んで勉強したらいいか」とたずねると、資本論やマルクス・スミス・ケインズ…と次々と挙げてくれました。「卒業までの短い間に読みのれませんが」と言うと、先生は「生涯をかけて学ぶ入口を教えたまでだ」と。私は卒業してからこれまで、これらの書物を何度読み返したことでしょう。当時の教科書だった林発先生の著書も、卒業後に何度も読み、書き込みをして勉強に使いました」。

活きたお金の使い方をする

樹研工業がますます世間の注目を集めたのは、世界最小の歯車を開発したこと。実は使う道のない部品。「見ームダのようですが、これによって広く世界に会社の存在が知られたのですから、決してムダにはならなかったわけです。

「ある時、女子社員が「アメリカに留学したいので、半年の休みをください」と言ってきました。その間は無給という約束で快く送り出し、期間の終わりが近に少額ながらこっそりボーナスを振り込みました。思いがけない入金に彼女は助けられたようで、以来ずっからは国以上の働きをしてくれました。

「現場」というとキツイ、キタナイというマイナスのイメージを持たれがちですが、当社の現場は最新鋭のクリーンルームです。技術開発にも人を育てるにも金はかかります。しかし、社員が安心していきいきと働き、オリジナリティの高い製品を開発すれば、お金は必ず活きます」。

昨今の成果主義に流らず、「社内で競争するな。助け合い、他社に負けないものを作れ」と声をかける松浦さん率いる樹研工業は、次にどんな技術で世界をあっと驚かせるのでしょうか。

Matsuuralism

1 お金が全てではない
金持ちになろうとか有名になろうとか、偉くなろうとか思ってはダメ。これらは結果であって目的ではないのです。

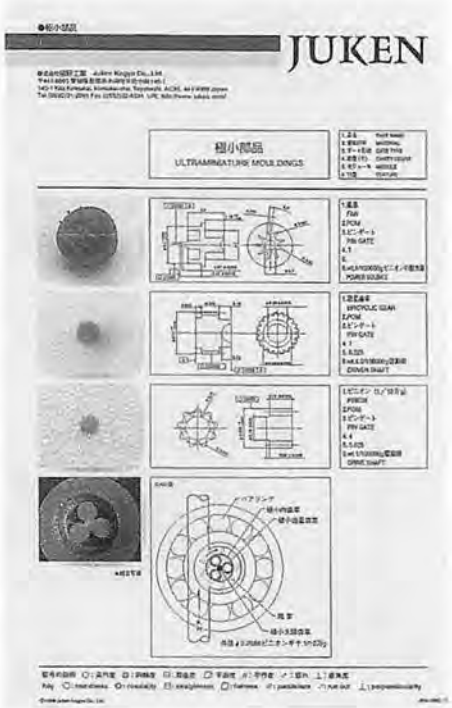
2 目標を持つこと
当社でチャンスを与えられ目的を持つと、かつて落ちこぼれと呼ばれたような子も目を輝かせて開発に取り組みます。

拾い込まれた、林先生の本には、至る所に書き込み…

最先端技術を駆使して生み出される極小サイズの部品たち。

指先で触れるとなめらかな部品。拡大すると細かな溝があります。

愛知大学通信 Vol.179 2008.3.17



松浦元男

昭和35（1960）年法経学部経済学科卒業。学生時代はジャズバンドで管楽器を演奏し、卒業後はアイセロ化学に就職し、その後独立し、樹研工業を設立した。この会社はよくテレビにも紹介されているが、100万分の１gという夢の歯車を完成させるなど、現在まだ使われていないが、医療器具、通信機器の極小化の方向を見越して先手を打った部品である。

学生時代はアルバイトで忙しかったようだが、愛知大学の先生から「生涯をかけて学ぶ入口を教えてもらった」と言い、今でもマルクスやケインズを読みあさり、随筆・経済論評も執筆する。

彼の発想は豊かでユニーク、音楽の勢いでもあろうか、大学の理工学部より工業高校卒業者のほうが固定概念がなく、頭が柔らかで独創性があると言っている。そして入社は申込順に採用するという。

(5)　2004年（平成16年）6月17日（木曜日）　毎日新聞

愛知大学出身

郷土が生んだ日本画家・平松礼二氏

作品展「遥かなる旅路」

豊橋市美術博物館で来月4日まで

初期から最新作60点

郷里、母校への愛

思いを込めた大作寄贈

郷土が生んだ日本画壇を代表する作家・平松礼二氏の「遥かなる旅路―平松礼二展」が豊橋市美術博物館で開かれている。7月4日まで。（文・カメラ　毎日新聞・愛大写真研究会名古屋支局）

1978年作「路」シリーズの大作前での平松氏

オープン時に祝辞を述べて、1年先輩の早川市長（中央）と固い握手

「遥かなる旅路」のオープニングセレモニー。左は夫人の裕子さん

早川市長の「郷里の誇り」と話す平松氏

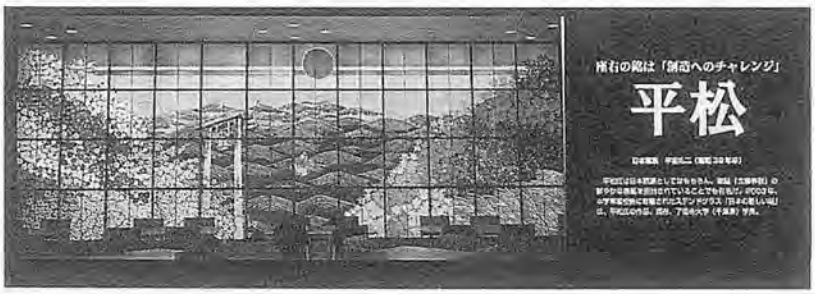
ギャラリー・サンセリテで開かれている作品展

平松礼二

昭和40（1965）年法経学部経済学科卒業。本名邦夫であり、通名礼二である。そのため邦夫のサインの「富士山（初期の作品）」が愛知大学に眠っていたが、気がついた職員がその絵画を補修し、現在名古屋車道校舎13階に展示している。

中学時代から美術関係に興味があり、いったんは普通科の高校へ進学したが旭丘高校・美術科へ転校した。その後愛知大学へ進学し、「夢があり、希望があり、愛と知をまさぐりつづけた愛しき日々」と当時を懐かしむ。彼は近年『文藝春秋』の表紙を担当しており、日本画壇を代表する画家である。また、現在、多摩美術大学教授を経て、了徳寺大学学長でもある。

愛知大学車道校舎に寄贈された「日本の新しい朝の光」のステンドグラスは自由受難と桜ともみじを愛し、母校愛知大学を湘南・鎌倉から見た構図として製作したものである。



次に松浦元男君。彼は昭和35（1960）年に愛知大学を卒業しました。学生時代、ジャズバンドで管弦楽器をやり、ダンスホールへ行って学費を稼いでいた。アルバイト学生です。卒業間近になってどういう勉強をしなきゃいけないかを聞くため、彼はある先生のところに訪ねていった。そうしたら「ケインズを読め。マルクスを読め。アダム・スミスを読め」。それが将来の基本になる入口だ、学問の入口だと。それで彼は卒業してからもそれを何遍も読んだ。その時もやはり林要先生や小幡先生が出てくる。そのくらい当時の愛知大学の教授達には魅力が、学問的な魅力と人間的な魅力があった。そういうことを信じて東松照明君も松浦元男君も現在があると私は思う。松浦元男さんを大橋さん知ってますか。

大橋　知らないです。

越知　知らない。覚えておいてください。愛知大学の卒業生です。「100万分の１ｇの歯車」の。

大橋　その松浦さんですか。ジャズとおっしゃったので。樹研工業の松浦さんですね。

越知　そうです。NHKでも経営学についてひっぱりだこです。愛知大学で経済学・経営学を学び、今NHKや塾で講義をする講師にもなっている。学者であり評論家であり随筆家であり、そして夢の100万分の１ｇの歯車を作った。彼は愛知大学では生物・科学、実際そんなことはあまりやってない。単位を取っただけだと。しかし愛知大学でやった経済のマルクス、ケインズが中心になって、あるいはアダム・スミスが中心になっての経営学である。今この人は全国的に有名ですよね。これは経済学原理に合っている。「最小の物を作って無駄を少なくする」。今の例えば環境破壊やCO_2の問題も含めて考えられることですね。ゴミになって樹脂は捨てられるでしょう。土に還らないでしょう。野菜なら還る。木なら還る。プラスチックは還らない。腐らない。公害になる。だからそういうものはできるだけ小さいほうがいい。まだ使われておりませんよ。将来使われるだろうという夢を求めている。ロマンを求めている。あそこの会社の社員は大学出は要らない。頭が堅いから。工業高校出のほうがはるかに役に立つ。100万分の１ｇの歯車は工業高校を出たような発想力、想像力の豊かな人が作った。今そのために世界各国から、100万分の１は使えないけれども１万分の１とかそういうのは使えるから、注文がどんどん殺到しています。あそこへ行くと工場も屋根も全部黄色。夢を売る。６月20日の３時から愛知大学で講義をやりますから、その時に愛知大学で何を学んだか、きっと本人が語られるでしょうから聞いてください。

その次に平松礼二君。愛知大学の卒業生です。この方は愛知御津のほうにお父さんがおられて、本当は絵を描きたかったけれども財政的に大変だったので、愛知大学の法経学部に入った。本来は美術学校へ行きたかった。お金の面で「お前それで食っていけるか」と親御さんから言われたそうで行けなかった。しかし絵は描かずにおられないくらい好きだった。県立の旭丘高校の美術科を経て愛知大学に入った。そして能力がどんどん伸びていって、今では日本画の重鎮になりました。大きいのは１点が何百万です。今彼の描いた「日本の新しい朝の光」という絵の原画が愛知大学の応接間に飾ってありますから、帰りに見ていってください。これはどういう絵かと言うと、愛知大学を思う絵だそうです。遠く鎌倉から三河湾を臨み、愛知大学がある。僕の学んだ愛知大学が見える。そこで青春の思い出を描きながら「自由受難」という愛知大学のシンボルを絵に入れて、モミジとサクラと四季の花を入れて、太平洋の波からずっと日の出を見るという感じで、そういう構想で描いた。これも今美術館なんかでひっぱりだこです。特にこの人が絵を習う時には、名古屋の大須に万松寺という（織田信長のお父さんの墓を祀っていて、信長が抹香を投げたという）お寺があるんですが、そこの伊藤治雄君という私の同級生のところが面倒を見ていた。日本画の岩絵の具って高いんですよ。だから材料を買うのに大変なんです。学生なんか描けない。そういう時に面倒を見てもら

ったというので、ずっと愛知大学への思いは深い。

(2) 彼らが学んだ法経学部の15科目の教授陣とその講義内容（口頭および写真・資料参照）

愛知大学の卒業生３人をご紹介しました。彼らが愛知大学で何を学んだか。愛知大学にはどんな先生がいたのか。お２人だけご紹介します。先ほど言いました東松君は写真部の、私より１年後輩。昭和５（1930）年生まれで年は一緒です。松浦君も学生時代からの友達。平松君は絵をやるようになってから、豊橋で初めて企画展をやった。その時「越知さん協力してくれんか」ということでいろいろ協力してあげた。美術館からも頼まれた。初めての企画展だから成功させないと平松君の一生にも関わる。「成功させたいのでたくさん見にきてもらうように同窓会にも話してくれ」と。美術館の友の会にも。それでごく親しくなった。今は了徳寺大学の学長さんをやっています。３年前は多摩美術大学の教授をやっていた。３人とも全部林要さんのマルクス経済学（金融資本論の大家ですよね、この人は）の影響がある。経済の物の見方が大きい。林要さんというのはものすごい偉大な人で、北朝鮮の金日成さんにご家族共ご招待を受けて、１か月間国賓並みで北朝鮮を歩いておられた。奥さんとお孫さんのイズミさんと一緒に北朝鮮に特別招待。そして中国に行けば副主席と会ったり。そういうふうに世界的に有名な学者です。私のゼミの先生だったし、卒業してからもずっと。私の家業は床屋で、松浦君は学生時代から頭を刈りに来た。林さんは「越知、お前が床屋をやったから俺はこれを機会に頭を刈るよ」。今まで刈らなかった。全部奥さんが鋏でやっていた。床屋へ行ったことないけど、「君がやるなら」ということでそれから頭を刈るようになった。そういうことで家族的にも親しくしていた。東京の世田谷区久我山に１山買っている。本間先生は「共産党の金持ちだ」と冷やかすんです。林先生に言わせると「金融資本のおかげだ」と。同志社大学で教授をやっていて、辞める時に千円の退職金をもらった。お父さんにもらった千円とで久我山１山買った。それがバブルによって評価がどんどん高くなってきて大地主になった。「これは金融資本の弊害だ」というわけです。そういうふうに物の考え方でいろいろ引用の仕方があるわけですが、その林さん家族とも親しくしております。

それからもう１つ小幡先生の財政学。ここにも小幡先生の財政学のゼミをやった方がいらっしゃいますよね。財政経済の基本は何か。学者というのは口で言ってるだけではだめだ、それが即市民のために役立たなければという。だから地方財政をやった。愛知大学が昭和30年代財政的に苦しかった時に、ここに手紙がありますが、本間学長が病気で、手術をしたあと、その時に財政学の先生として愛知大学の理事長・学長に手紙を出した。「いくら財政が厳しいと言っても、一括して全て１割減なんていうやり方はしないでください。それぞれの適切な評価によって１割もあり１割５分もあり５分もあるというやり方をして、正直ものが馬鹿を見ないようにしてください」という手紙です。これは了解を得ていませんけれども、おそらく小幡先生は「越知が見せるならいいよ」と言ってくれたと思います。そんな偉そうなことをなんで言うのかと言うと、実は小幡先生も私のゼミの先生なんです。ケインズ経済学のほうのゼミに入っていたので小幡先生のゼミで発表した。それで小幡先生の家族とも親しくしていて、先生の奥さんが病気の時はうちの息子が往診に行っている。そのくらい小幡先生と親しくしている。だからおそらくこういうものを出しても怒らないだろうと思いますけれども。

小幡先生は愛知大学の教授を辞めて名誉教授になられて、それ以後は俳句を作ったり短歌を作ったり書をやったりした。書でも面白い「整容」という、頭を刈ってきれいにしろということですね。容姿を整えろという。武蔵の出だから武山人の雅号を持つ。本間先生が愛知大学を創るというから急いで、今までの住いを全部売っちゃって豊橋へ来た。財政は厳しい。厳しいけれども本間先生の

魅力に惹かれて愛知大学へ来て、財政学の先生をやっていた。だから財政についてものすごく厳しい。小幡清金というんですが、われわれ学生はその時分「オバキンさん」と言っていた。「間澹（かんたん）。心静かにして欲少なし」。このとおりです。そしてその時分生活が苦しいから、奥さんが鶏を飼って卵を生ませて生計の補助にしていた。これは本当の話です。私も見たことがある。本間先生が行ったら鶏が動いてびっくりした。「何だこれは」と。そのくらい教授連の家計は厳しかった。しかし本間先生の財政の考え方は、事務職員と同じように考えなさいということだった。働く人を大事にしろと。学者はあっちこっちで講師を頼まれれば謝礼をもらうだろう。だから事務職員の待遇を良くしろというのが本間先生の考えで、今もその点では愛知大学の職員の給料は割合いいという評判です。関係する税理士が言うから。そういうことで愛知大学は居る人をみんな大事にしようというのが本間先生の考えです。だからここにもあるとおり、農家姿の人と学長は並んでますよ。いろいろな人の話に耳を傾けて皆さんを大事にする。

２人の学者の個性と考え方をお話ししました。あとまだ十何人あるんですがお話しすると時間がなくなりますので、それは私が受けた授業の15科目にわたって資料がありますから回します。法経学部15科目の教授陣とその講義内容を説明すると30分も１時間も過ぎてしまいますから、次へ行きますので資料をご覧下さい。

昭和26年、27年度法経学部で受講した
専門科目の担当教授と講義内容

経済原論	小幡清金
財政学	小幡清金
経済学特殊講義	小幡清金
経済原論	林 要
金融資本の理論	林 要
経済学特殊講義	林 要
経済史	森谷克己
社会政策	森谷克己
農業政策	三好四郎
貨幣金融論	山本二三丸
景気変動論	山本二三丸
経済統計学	郡 菊之助
政治学原論	戸澤鐵彦
経済政策	四方 博
財務諸表論	田中藤一郎
憲法	一円一億

昭和26年度新制、旧制綜合時間割表

日	法学科	経済学科	日本法経学部	社会学科	国文学部
学（橋 迫）②	憲 法（一円）(講堂)				
1 2年部 （金丸）④	民法Ⅰ部（黒 木）④	各国経済史（四方）(講堂)			
部 ：2年英語 （木）③（石田）④	刑事訴訟法（松 浦）③	各国経済史（四方）(講堂)	刑事訴訟法（松 浦）③		
部（胡蘇木）③	英 外 国（黒 木）③		英 外 国（黒 木）③		
学（玉 井）③	政 治 史（松 浦）③	経営学Ⅰ部（大石）(講堂)			
部：2年英語 （沢）③（大林）③	民事訴訟法（巻 山）③	商 業 政 策（三 好）③	民事訴訟法（巻山）③ 商業政策（三好）③	新 聞 学（斎 藤）③	
部）2年部語 （丸）③（根沢）③		経 済 史（森谷）(講堂)		社会学概説（林 要）③	
学（林 要）③	政治社会思想史（小幡井）③		政治社会思想史（小幡井）③	ロシヤ文学概説（根 沢）③	
（久曽神）③	民法Ⅰ部（黒木）③ 民法・債権（長谷）④	経営学Ⅰ部（大石）(講堂)		現代科論（丸 山）③	
（鈴木中）③	商 法 Ⅰ 部（竹井）(講堂)				国文学概論（久曽神）③
（伊 藤）③	行 政 学（戸 沢）③	国外事（小幡）③ 国外事（鈴木）③	国外事（小幡）③ 国外事（竹井）③ 国外事（鈴木）③		国文学講読Ⅰ部（久曽神）③
（大 石）③	経済学原論（戸沢）(講堂)			文（鈴木中）③	

小幡清金
明治31(1898)年８月生れ。
大正12(1923)年東京帝国大学経済学部卒業。
昭和20(1945)年台北帝国大学教授を退職後、22年４月より愛知大学法経学部（旧制）教授に。
経済原論、財政学、貨幣金融論、予科経済通論などを担当し、理事および図書館長にも就任。

——目　次——

第一章　経済の概念
一、経済財
二、経済行為、経済原則
三、経済組織
第二章　経済組織の発展
一、自然経済
二、単純商品生産経済
三、資本主義経済
第三章　経済学
第一節　経済学の対象及び目的
一、研究対象に属しないもの
二、研究の対象及び目的
第二節　経済学の三部門
一、理論経済学
二、経済史
三、経済政策学
第三節　〔近代〕経済学の発展
一、アダム・スミス以前
二、古典学派
三、社会主義学派
四、歴史学派
五、近代経済学
A．オーストリア学派
B．ローザンヌ学派
C．ケンブリッジ学派
D．ケインズ学派
第四章　価値及び価格の理論
第五章　貨幣及び信用の理論
第六章　所得論
第七章　景気循環論
第八章　国際経済論

「経済学原理」講義要項

第一章　経済の概念
一、経済　財の分類
1．生活すること＝種々な欲望の充足——所謂「物質的欲望」と「精神的欲望」
2．財（広義）＝欲望満足手段（自由財と経済財）
3．効用＝財のもつ欲望満足能力又は財によってもたらされる欲望満足
4．限界効用、限界効用逓減法則＝財の最後に追加される単位のもつ効用（限界効用）。財貨の限界効用はその財貨の増加するにつれて逓減する。
5．経済財＝各種の用途に対して相対的に稀少な財＝従ってその獲得には労働又は代価（価格）という犠牲（費用）を必要とする財＝交換価値をもつ財——交換の対象とならない財。「公共財」（道路、公園）

小幡清金先生

小幡清金先生から学んだ学科は、経済学原理、財政学、ケインズ経済学と演習である。

愛知大学が出来ると聞くや、本間喜一先生のもとへ、東京武蔵野を引き払って三河の地へやって来た。財政学の権威である。

昭和34年頃、愛知大学が財政的に困難な時、それも本間先生が病気療養中にお見舞いを兼ねた手紙の中で次の訴えをした。

「経費節減も一率ではなく、夫々の事情に応じてカットすべき、正直者がバカを見ないように」とも書いてあった。

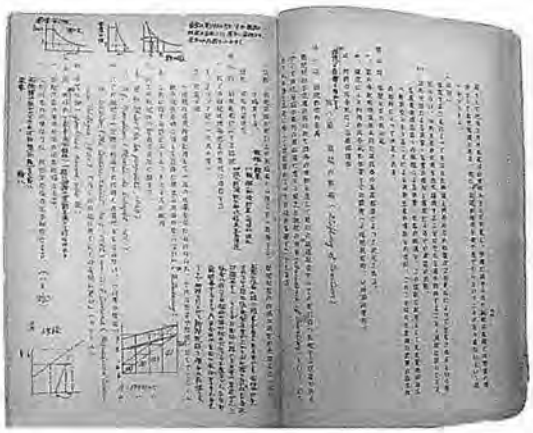
奥様は「ニワトリを飼って卵を生ませ、生計の一助にした」と本間先生からお聞きした。

大学退官後は、孔子や孟子を読みあさり、短歌を作り、書を習っていた。その書「整容」は容姿を整えることであり、「間澹」は「心静かにして欲少なし」である。

財政学講義要綱

――目　次――

第一章　財政の意義
　第一節　財政の概念
　第二節　財政と私経済
第二章　財政学、財政学の発展
　第一節　財政学の三部門
　第二節　古代の財政と財政思想
　第三節　近代の財政学
　第四節　現代の財政学
第三章　経　費
　第一節　経費論の帰属問題
　第二節　経費の範囲
　第三節　経費支出の原則
　第四節　経費の分類
　第五節　経費膨脹の傾向
　第六節　経費の経済的効果（生産性）
　第七節　財政々策の理論
第四章　収入の意義及び分類
　第一節　収入の意義
　第二節　収入の分類
第五章　本源的収入
　第一節　本源的収入の財政的地位
　第二節　公有財産収入
　第三節　公企業収入
　第四節　手数料（行政的収入）
第六章　移転的収入
第七章　租　税
　第一節　租税の意義
　第二節　租税の術語
　第三節　国民所得と租税負担
　第四節　租税の種類
　第五節　課税原則
　第六節　租税負担の配分
　第七節　租税の経済的作用
　第八節　租税の転嫁
第八章　主なる租税
　第一節　収益税
　第二節　所得税
　第三節　財産税
　第四節　相続税及び贈与税
　第五節　流通税（交通税）
　第六節　支出税（消費税）
　公　債
　　公債の意義及び起因
　　公債の発達の条件
　　公債の種類
　　公債の起債
　　公債の変更
　　公債の償還
　　公債の経済的作用
　歳計制度
　　歳計制度の意義
　　予　算
　　決　算



財政学試験問題

（26年10月23日）

次の諸問題中五題を選択して答えよ（一問各二〇点）

一、国家の経費は不生産的であるという説は正しいか。その理由を述べよ。
二、社会的極大利益原則とは何か。
三、限界消費性向及び投資乗数とは何か。両者の関係如何。
四、信用造出による収入とは何か。この経済的作用を説明せよ。
五、課税に於て財政原則と公平原則といずれが優先すべきであるか。その理由を記せ。
六、租税は各人のうける利益に応じて課するのが公平であるか。その理由を問う。
七、課税はつねに資本蓄積を停滞せしめるか。その理由を述べよ。
八、公債の発行は生産を阻害するという説は正しいか。その理由を記せ。
九、外国債の利害を問う。

アタマはすすむ
頭髪の美学
「ミイディアム・カット」
小幡清金氏
愛大教授
法経学部長
（7）

本書を作り上げることは著者にとっては長い間の遂れようとする闘い――思惟と表現との習慣的な方式から遂れようとする闘い――であったが、大部分の読者にとっても、もし著者の読者への強襲にして功を奏するならば、本書を読むことは同じ闘いとならなければならない。著者がここに苦心して表明した諸観念は、きわめて簡単であって、容易に理解されるはずである。困難は、新しい観念にあるのではなく、大部分のわれわれと同じように教育されて来た人々の心の隅々にまで拡がっている古い観念からの脱却にある。

一九三五年十二月十三日

ジェイ・エム・ケインズ

ジョン・メイナード・ケインズ年譜

一八八三年六月五日　ケンブリッジに生まる。
一九〇六―八年　印度省に勤務。
一九〇九年　マスター・オブ・アーツを得。母校キングズ・カレッジの評議員となる。
一九一二年　エコノミック・ジャーナルの編集主任となる。
一九一九年　大蔵省主席代表としパリ平和会議に出席。
一九二一年　マクミラン委員会の一員に選ばる。
一九四一年　英蘭銀行理事に就任。
一九四三年四月　戦後国際金融機構に関するいわゆるケインズ案を発表。
一九四四年七月　ブレトン・ウッズで開かれた国際金融会議において復興開発銀行理事会の委員長に推さる。
一九四五年八月　英米金融協定なる。
総額四十四億弗の借款交渉のため渡米、十二月
一九四六年四月二一日　サセックスの自邸において心臓麻痺のため急逝。

目　次

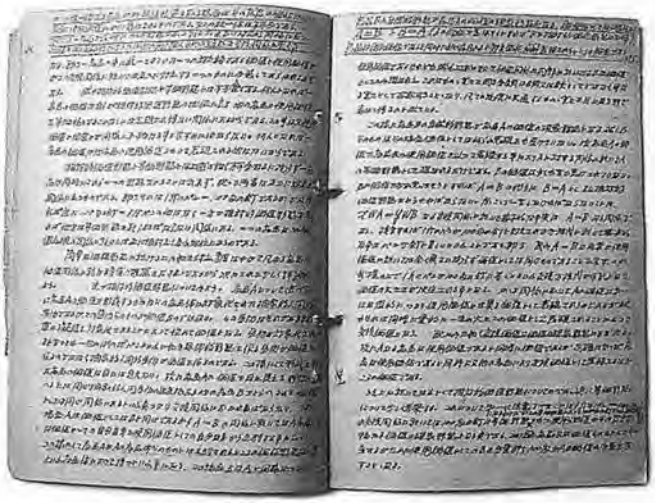
訳者序
日本版への序
原著者序
第一編　緒　論
　第一章　一般理論
　第二章　古典派経済学の公準
　第三章　有効需要の原理
第二編　定義および基礎概念
　第四章　単位の選定
　第五章　産出高および雇傭量を決定するものとしての期待
　第六章　所得・貯蓄および投資の定義
　　一　所得
　　二　貯蓄と投資
　　補　論　使用者費用について
　第七章　貯蓄および投資の意味についての続論
第三編　消費性向
　第八章　消費性向　一、客観的要因
　第九章　消費性向　二、主観的要因
　第十章　限界消費性向と乗数
第四編　投資誘因
　第十一章　資本の限界効率
　第十二章　長期期待の状態
　第十三章　利子率の一般理論
　第十四章　利子率の古典派理論
　　補　論　マーシャルの『経済学原理』、リカアドオの『経済学原理』、その他における利子率について
　第十五章　流動性への心理的ならびに産業的動因
　第十六章　資本の性質に関する諸考察
　第十七章　利子および貨幣の基本的性質
　第十八章　雇傭の一般理論再説
第五編　貨幣賃金および価格
　第十九章　貨幣賃金の変動
　　補　論　ピグウ教授の『失業の理論』
　第二十章　雇傭函数
　第二十一章　価格の理論
第六編　一般理論の示唆に関する若干の覚書
　第二十二章　景気循環に関する覚書
　第二十三章　重商主義、高利禁止法、スタンプ附貨幣および過少消費説に関する覚書
　第二十四章　一般理論の導くべき社会哲学に関する結論的覚書

林　要
明治27(1894)年５月生れ。
大正９(1920)年東京帝国大学法学部卒業。
大原社会問題研究所所員、同志社大学教授などを経て、昭和22（1947）年４月より愛知大学法経学部（旧制）教授に。
経済原論、経済学史、経済学特殊講義などを担当。

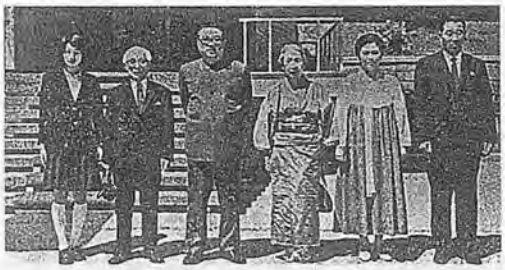
愛知大学法経学部　経済原論一部　要項

経済原論　林要教授

第１章　経済学の対象
第２章　人間－社会－労働－生産
第３章　社会法則の一般的規定
　第１節　再生産過程
　第２節　生産力の諸要素
　　(1)　労働力
　　(2)　労働手段
　　(3)　労働対象
　第３節　生産様式
　第４節　社会構成
第４章　生産力の発展過程
　　(1)　労働食の発展過程
　　(2)　労働手段の発展段階
第５章　商品生産の発展段階
　第１節　減資共同社会に於ける協業と分業
　第２節　減資共同社会の放壊と商品生産の発展
第６章　商品
　第１節　商品の二要因としての価値と使用価値
　第２節　価値形態又は交換価値
　　(1)　簡単な価値形態
　　(2)　拡大された価値形態
　　(3)　一般的価値形態
　　(4)　貨幣携帯
　第３節　商品の交換価値
第７章　貨幣（商品流通）
　第１節　価値尺度としての貨幣
　第２節　流通手段としての貨幣
　第３節　価値物そのものとしての貨幣
　　(1)　蓄財手段としてのG
　　(2)　支払手段としての貨幣
　　(3)　世界貨幣としてのG
第８章　Gの資本への転化
第９章　剰余価値の生産
　第１節　剰余価値はどこから生まれるか
　第２節　剰余価値は如何にして生産されるか
　　(1)　労働過程
　　(2)　価値増殖過程
　第３節　若干の用語定義
　　(1)　可変資本と不変資本



　　(2)　固定資本と流動資本
　　(3)　剰余価値率と利用率
第10章　絶対的剰余価値の生産
第11章　相対的剰余価値の生産
　第１節　相対的剰余価値
　第２節　相対的剰余価値の発展
　　(1)　単純協業
　　(2)　マニュファクチャア
　　(3)　機械による大工業
　第３節　相対的剰余価値の生産
第12章　資本の蓄積
　第１節　単純再生産
　第２節　資本の蓄積又は資本の拡張再生産
　第３節　資本の蓄積と労働力の需要
第13章　本源的蓄積
以下金融資本論へ続く



延豊湖畔にて
（一九七四年六月三〇日写す）

李先念副総理（右）と筆者（左）

アタマはすすむ
頭髪の美学
林要愛大教授（17）
プロフェッサー・カット」
学術会議議員
（技術・文・カメラ、理
宗大学講師＝越知裕習）
（中日新聞二月二六日）
訂正
二月二日付本欄の記事は、豊田貨幣資料館の誤りであります。謹んで訂正、お詫びします。

随想　中国人の歩きかた

愛知学院大学教授　林　要

1. プロ独裁理論学習

錦江飯店の14階で，上海市革命委員会副主任の徐景賢さんは，わたしたちのために晩餐の宴をひらいてくれた。団が日程をおえて帰国の途につこうとする前日の8月11日のことである。

徐さんは長身で若い。39才だとか。なぜだか，わたしはフト写真でみる王洪文副主席を連想した。

宴たけなわとなり，わたしは答礼のあいさつに立ちあがった。

「わたしたちの団は文字どおり老・壮・青の三結合です。おかげで人間関係はこの上なく円満に愉快にいっています。

ところで，人民大会堂の正面には大きな山水の壁画があり，その賛には『江山如此多嬌』とあります」

と私はいったが，じつは副総理に会うときには，いきなり会見室へ案内されたので，この壁画をみることはできなかった。しかし私は以前にみたことがある。

すこし因縁ばなしになるが，この山水画の筆者だときく傅抱石さんとは1964年南京で招宴のテーブルを共にしたことがあり，わたしの背面帖には，そのときの主人公銭瘦鉄さんの詩を書いてもらった思談がある。不幸にもその傅抱石さんの訃が報ぜられたのは，それからまのないときだった。

「老人のわたしなどは，お国のかくのごとく多嬌，かくのごとく誤わしい山河にも接したいと思いましたが，壮・青の元気な連中に突きあげられて，北京いらい西安でも，延安でも，ここ上海でも，もっぱら文革から批林批孔をへて，燎原の火のごとくいま中国全土に燃えさかるプロ独裁理論学習運動ばかり学んできました。そして体制のもがいをこえて多くのことを教えられました。

それによって初めてわかったことの一つは，わたしどもの三結合がどうもニセモノだということでした。革命ぬきの三結合だの，理論学習だのは，どう考えてもホンモノではありません。そのことをつくづく教えられました。

さきほどの懇談会のとき，第二百貨店の売子さんだという曹さんは……」

と言いかけると，

「曹さんはそこにきていますよ！」

とだれかが声をかけた。みると，おとなりのテーブルで背をむけて坐っていた曹宝妹さんが顔をこちらへ向けた。27才だと，あのとき自己紹介した，かわいい子娘である。

目　次

はしがき
にわとりとデモクラシー（序文にかえて）
前篇　資本のおいたち
　第一章　問題はどこにあるか
　第二章　社会とはなにか
　　㈠　金融資本と社会
　　㈡　人間および社会
　第三章　資本の発生まで
　　㈠　原始共同社会
　　㈡　私有財産の発生
　　㈢　奴隷社会
　　㈣　封建社会
　　㈤　商品生産と貨幣
　第四章　資本の発生
　第五章　資本主義的商品生産
　第六章　商業資本から産業資本へ
　第七章　自由競争
後篇
　第八章　産業資本から金融資本へ
　第九章　金融資本についての・いちおうの定義
　第十章　貨幣――信用――銀行
　　㈠　貨幣のむだ
　　㈡　不換紙幣と信用貨幣
　　㈢　流通信用と銀行
　　㈣　資本信用と銀行
　　(1)　貨幣資本の適期的な休息
　　(2)　資本信用
　　(3)　信用をつうじての銀行の支配
　第十一章　創業利得
　第十二章　資本の動員
　第十三章　株式会社と銀行
　第十四章　資本主義的所有
　第十五章　独占と金融資本の形成
　　㈠　産業の独占化
　　㈡　独占と銀行
　　㈢　金融資本の形成
　第十六章　独占の波及性と独占価格
　第十七章　金融資本と生産制限
　第十八章　金融資本と失業
　第十九章　カルテル保護関税と「国民の搾取」
　第二十章　金融資本と資本の輸出
　第二十一章　帝国主義と戦争
　第二十二章　金融資本と諸階級
　　㈠　地主階級との関係
　　㈡　中間階級との関係
　　(1)　中小資本家階級との関係
　　(2)　サラリーマン階級との関係
　　㈢　プロレタリアートとの関係
　第二十三章　金融資本の反文化性
　第十四章　あたらしい社会への展望
　第十五章　金融資本の横顔さまざま
　　㈠　二つの世界
　　㈡　一般的危機
　　㈢　どこから社会革命はおこるか？
　　㈣　わが金融資本の横顔

附　録
　資本論と金融資本論
　金融資本論とその著者
　　(1)　人形と人形つかい
　　(2)　資本論いごの資本論
　　(3)　ヒルファディングの略歴
　　(4)　金融資本という言葉
　　(5)　金融資本の祖国
　　(6)　大戦前のドイツの経済
　　(7)　「城内平和」と「祖国の防衛」
　　(8)　左と右へ
　　(9)　ヒルファディング＝ジノヴィエフの論戦
　　(10)　「組織された資本主義」と「超帝国主義」

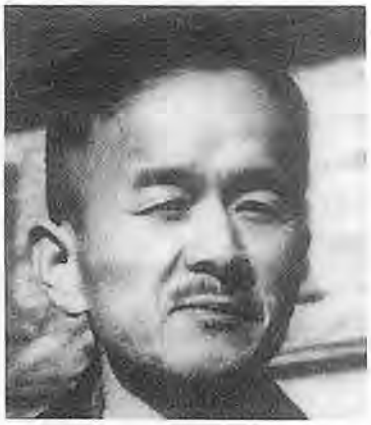
林要先生

林要先生には、経済学原理、金融資本の理論、経済学特殊講義とゼミナールを学んだ。

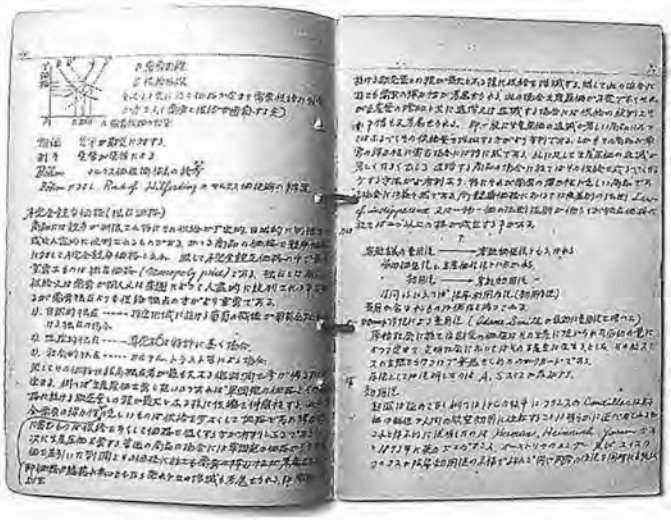
「ヒルファーデングの金融資本論」の翻訳者として有名。日本学術会議会員として活躍。同志社大学で頂いたお金などで、東京世田谷、久我山一帯と蓼科の別荘を買えたのも、「金融資本の弊害のなせる業」ともいいながら、夏期のゼミは蓼科に学生を集めた。

日本の学者や芸術家など幅広い交流を持つと同時に、中国や北朝鮮の首脳とも交流があり、中国を訪問したり、北朝鮮の金日成主席に招かれて１ヵ月間、奥様やお孫さんとともに国賓待遇を受けられている。

随筆など時折り郵送して下さったり、本間先生を訪問した事を耳にすると、杉並の久我山と世田谷の北烏山は距離にして１キロほど、「僕のところにも寄りなさい!!」と催促のお葉書を頂いたのである。



森谷克己
明治37(1904)年１月生れ。
昭和２(1927)年東京帝国大学法学部卒業。
昭和21(1946)年京城帝国大学教授を退職後、22年６月より愛知大学法経学部（旧制）教授に。
社会政策、経済原論、経済史、社会科学概論などを担当し、学生部長にも就任。
昭和27(1952)年退職。



経済史　森谷教授　1950

歴史時代
　記録文学或は国家組織の成立した時代
　西洋の古代経済社会　奴隷経済時代
　東洋の古代経済社会　西洋の概念は適応できない
経済史の目的
歴史時代の初期を奴隷経済とするか否か（東洋）
　中国では生産的過程活動を奴隷が引き受けるような量的多数は存在しなかった
　奴隷の地位
　経済段階
国家の発生
　(1)　階級分裂　族内的原因による国家の発生
　(2)　牧人種族が原始農民を征服　族外的原因による国家の発生
国家成立の最初
　東洋　殷王朝で多分に征服的内容を含む
　西洋　ローマ国家
　封建組織
　　国王　諸侯　家臣　農奴　隷農
　ギリシヤローマ時代の奴隷経済は何故に発達したか？
　　J・K・イングラム『奴隷及び農奴史』1895
　中世のヨーロッパ
都市
　ヨーロッパの都市の発生　９世紀～10世紀（内陸における）
　　商人及び手工業者の定住するところ
　東洋の都市発生
　　官僚の定着によってその周囲に手工業者又は商人が集めおかれた
　都市の機能
　　都市の中心として自給自足する
社会経済的組織
　西洋の社会経済的組織
　　Guild; Zunft　協同組合体組織
　東洋の社会経済的組織
　　前歴史時代を通じて変化していない。
　　官僚主義組織、皇帝は全国の主権者であり最大の土地所有者
近代の資本主義発達三段階
　(1)　Factor System; Verlags System　問屋制　14世紀
　(2)　16世紀の頃、散在した農家の工場が資本家の元に集まって分業的生産が行われるようになった。手工業は変化ない。
　　Manufacture
　(3)　Industrial Revolution　18世紀
　　英国　産業革命発祥地、資本主義の母国
　　①政治的革命
　　②英人の道徳的意識又は倫理的観念
　　③島国的地位の獲得
　　④資源の関係

社会政策講義要領

——目　次——

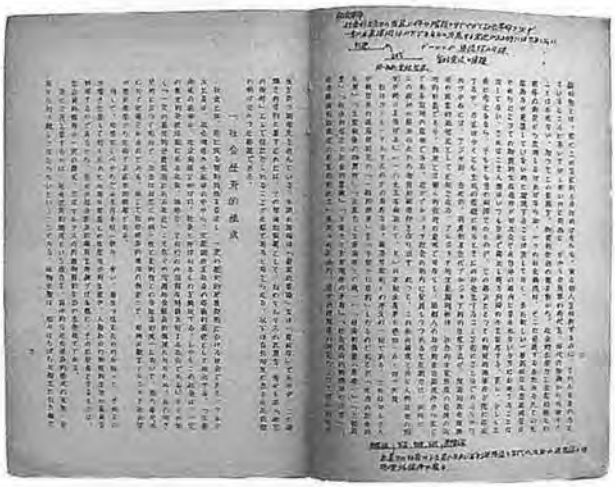
序　説
　Ⅰ　社会政策ということは
　Ⅱ　学問としての社会政策の成立
　Ⅲ　日本における斯学の発達
第一章　社会政策学の対象　任務および学問的性質
　Ⅰ　社会政策の概念
　Ⅱ　社会政策学の対象と任務
　Ⅲ　社会政策学の学問的性質の問題
第二章　社会政策の歴史的展開
　第一節　社会政策の前史
　　Ⅰ　ヨーロッパの古代——ギリシャおよびローマ
　　Ⅱ　ヨーロッパ中世の封建時代
　　Ⅲ　東洋的世界
　第二節　高度資本主義的世界の成立と種々なる労働問題の発生
　　Ⅰ　工業資本主義の発達と高度資本主義的世界の成立
　　Ⅱ　資本主義に随伴して発生する種々の労働問題
　第三節　労働者運動および社会主義の発達
　　Ⅰ　労働組合運動の発展
　　Ⅱ　社会主義の発展
　第四節　社会政策の展開
　　Ⅰ　イギリス的社会政策
　　Ⅱ　ドイツ的社会政策
　第五節　日本における社会政策の歴史

三好四郎
明治43(1910)年４月生れ。
昭和17(1942)年九州帝国大学法文学部卒業。
昭和21(1946)年東亜同文書院大学講師を退職後、22年５月より愛知大学法経学部（旧制）助教授に（のち教授）。
農業政策、外国書研究などを担当。

農業政策第一分冊（社会構成論）

目　次

緒　言
一、社会経済的構成
二、生産諸力を構成する可能的諸要因
　1、労働力の概念
　2、生産手段の概念
　　A、労働対象
　　a、天然自然に存在するところの労働対象
　　b、原料
　　B、労働手段（労働要具）
三、生産力と生産諸関係との弁証法的統一
四、生産力と生産諸関係との弁証法的統一に内在する矛盾
五、社会経済的構成交替
　A、原始コンミュニズム
　B、古代社会
　C、封建社会



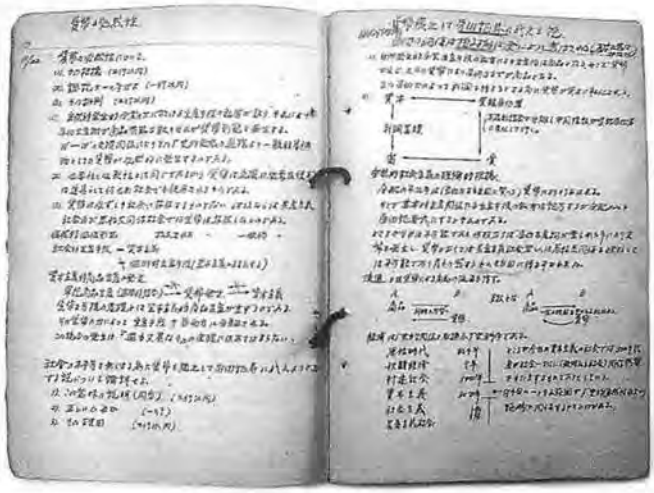
農業政策第二分冊（社会革命論）

目　次

一、政治と経済との関係
二、国家の本質
三、旧国家機構の破壊
四、社会革命の一般的規定
五、新しい国家機構
六、プロレタリアートの独裁
七、プロレタリア民主主義
八、ソヴェート国家

坂出市農家調査　昭和38年

山本二三丸
大正２(1913)年３月生れ。
昭和11(1936)年東京帝国大学経済学部卒業。
立教大学助教授を務めた傍ら、昭和22（1947）年愛知大学法経学部（旧制）講師に（のち教授）。
国債金融論、貨幣金融論、景気変動論、経済学特殊講義を担当。



貨幣金融論　山本二三丸

貨幣金融論は総論即経済原論の終了により総論に対する各論、此の中には、貨幣論、金融論（信用論）、地代論、企業集中論（工業政論）に入る事を原則とするのである。

経済
　一家の経済→国家の経済→「政治経済」→経済学
　　(1)　Economy　一家の経済＝ヤリクリ＝節約→富裕を指すもの
　　人間と生産物の関係
　　(2)　Political Economy　経済学（法則の探求）
　　社会科学の一部分、生産における人間と人間との関係
経済学の起源（Political Economy）
　　政策を客観的根拠により作成
　　一国の経済は富の増進方法を目的とした。

Ⅰ．「富とは？」
　　(1)　金銀のみとする　重金主義　Monetary System　重商主義　Commercial
　　(2)　人間の生活必需品を富とするもの。重農主義
　1．純生産物
　　(1)　農業が純生産物を作り出す　重農主義
　　(2)　一般農業に労働を加えて純生産物が増加（価値の増加）
　2．Political Economy-Principal
　　(1)　生産の三要素　労働＋資本＋土地
　　(2)　分配＝生産に対する貢献の割合に応じて分配される。
　　＝労働賃金＋利潤＋地代
　　Principal の破算　富が増加するほど失業・恐慌が激烈
　　分配の不公平
　　①空想的社会主義　分配だけを強制するのが空想的社会主義
　　②科学的社会主義　生産法則により分配
　3．経済の方法
　　(1)　数量的変化
　　(2)　質的変化（発展）
　4．マルクスの経済学　古典派経済より変化　社会科学的経済学
　　(1)　生産　物質＋労働＝変形＝生産物
　　対象物→道具→労働＝生産物

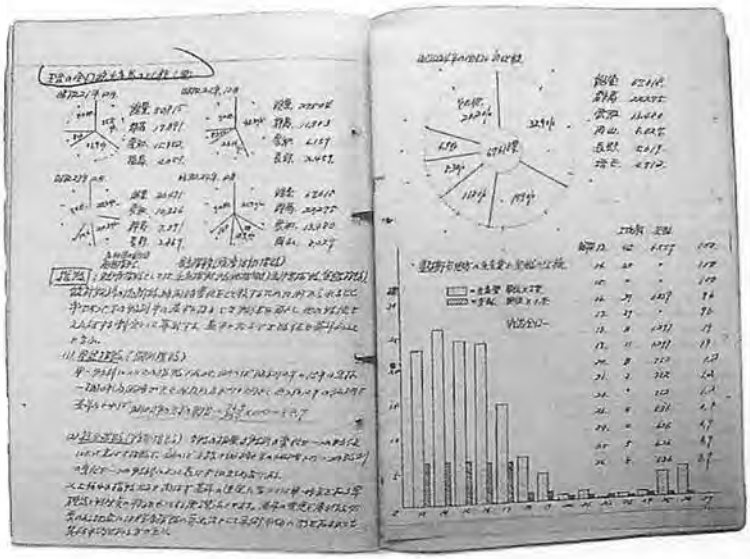
経済学特殊講義　景気変動論　1951年度　山本二三丸

Ⅰ．景気変動論の考察方法
　1．Modern Economism の方法
　2．科学的に景気変動を分析するもの
　3．科学的景気変動の究明の特色
　4．景気変動論の目標（課題）
Ⅱ．恐慌＝景気変動
　1．恐慌の社会に及ぼす影響
　2．社会主義国家と資本主義国家との対照
　3．恐慌と革命
　4．恐慌の局面
　5．恐慌の現象
Ⅲ．理論の考察方法
　1．自然科学の理論
　2．経済学の理論
Ⅳ．再生産論
　1．労働の移転及び保存
　2．労働力の価値
　3．労働力の作り出す価値≠労働力の価値
　4．剰余価値の資本主義社会の再生産
Ⅴ．資本主義社会の再生産の特色
　1．資本論の体系
　2．再生産の内容的考察
　3．社会的総資本の再生産
Ⅵ．単純再生産は如何に行われるか
　1．実現理論
　　(1)　総再生産の法則
　　(2)　実現理論
　　(3)　市場の理論
　2．拡大再生産
　3．拡大再生産の謬説
　4．恐慌の可能性、必然性、現実性
Ⅶ．恐慌論
　1．恐慌論考察上の注意
　　(1)　価値論
　　(2)　再生産論
　　(3)　資本蓄積論
　2．資本主義の内在的矛盾と基本的矛盾
　3．恐慌の説明方法
　4．マルクスの言う資本主義の内在的矛盾
　5．拡大再生産の意味
　6．山田盛太郎の誤謬
　7．上林貞治郎の誤謬（阪大）
　8．誤謬恐慌論
　　(1)　再生産の条件を均衡条件として理解する説
　　(2)　資本主義の内在的矛盾によって説明するもの
　9．消費について
　　(1)　減少消費説
　10．トロツキーの恐慌論
　11．正しい恐慌論
　12．宇野弘蔵の恐慌論
　　(1)　再生産の条件
　　(2)　内在的矛盾
　　(3)　批判
　13．恐慌論
　　(1)　恐慌の可能性
　　(2)　基本的矛盾
　　単純商品生産と資本制生産
　　(3)　世界市場を考慮に入れる

郡 菊之助
明治30(1897)年２月生れ。
大正12(1923)年東京商科大学卒業。
名古屋経済専門学校教授などを経て、昭和26（1951）年より愛知大学法経学部（新制）教授に。
統計学、商業学、職業指導などを担当。

経済統計学　1951年度　郡菊之助助教授

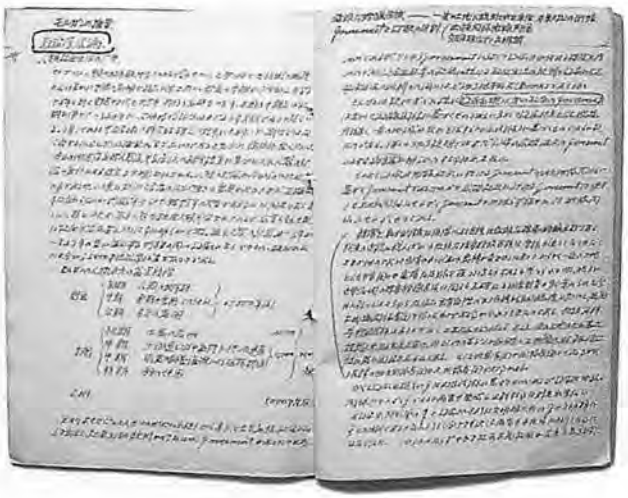
第１章　社会科学としての統計学
　　計量経済学
第２章　実証主義と経済研究
第３章　経済統計学の発展
第４章　経済統計の特色
　１．統計調査の方法
　　(1)　標本調査
　　(2)　推算
　　(3)　アンケート（尋問調査）
　２．比率の種類及び応用
　　(1)　比率（単純比率）
　　(2)　限界比率
　　(3)　弾力性
第５章　図表統計の問題
　１．棒図
　２．線図
　３．平面図
　４．ピクトグラム
　５．統計地図
第６章　予測統計の方法
　１．先行的数列
　２．中心的数列
　３．後行的数列
　４．図表による説明
第７章　予測統計の効果
第８章　統計的結論に関する注意



試験問題
(1)　統計学と経済学との関係（色々の角度より）
(2)　比率の種類と応用（ノート）
(3)　比図法の原理（ノート）
(4)　統計図表は何故左書を可とするか
(5)　経済統計と愛知県（産業・生産の系数）
(6)　統計から見た豊橋市（経済・社会的方面）

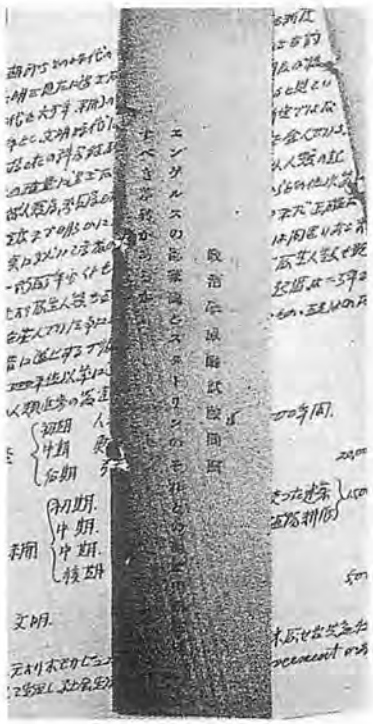
　豊橋地方に於ける生糸生産量
　生糸の全国総生産高の比較（貫）
　経済学と統計学との関係

戸澤鐵彦
明治26(1893)年８月生れ。
大正９(1920)年東京帝国大学法学部卒業。
昭和21(1946)年京城帝国大学教授を退職後、東京産業大学講師を経て、同年11月より愛知大学法経学部（旧制）教授に。
政治学、政治史、行政学などを担当し、理事にも就任。
昭和24年より名古屋大学教授を務めた傍ら、愛知大学にも兼任教授として出講。

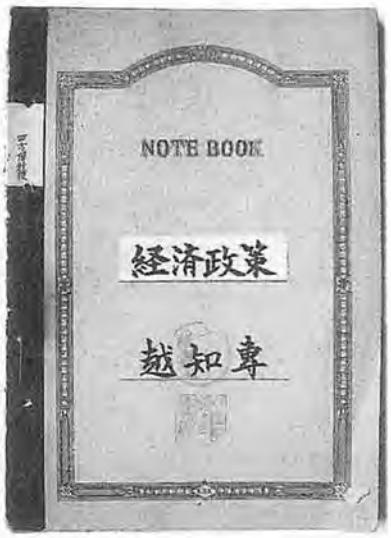


政治学原論

人類社会生産の歴史
　モルガンの推量
　　野蛮、未開、文明への段階的発展
　　（Ｌ・Ｈモルガン『古代社会』）
Government と国家の区別
　血縁関係と地縁関係
　文明期以前と文明期
エンゲルスの国家観
　(1)　階級対立
　　征服が機縁になったけれども一つの階級が他の階級を抑圧するに至った時国家は発生する。
　(2)　プロレタリアートの革命的独裁
　(3)　社会主義国家は労働者農民の国家である。
　(4)　国家は共産主義の段階に達すれば死滅する。
　　(国際情勢によっては共産主義の段階に於いても国家は存続する)
　(5)　共産主義原則
　　能力に応じて働き、欲求に応じて受ける。こうなると国家はその存在理由を失い死滅する。労働自身が生活の欲求となる。
エンゲルスはモルガンの国家観を唯物史観の立場から補強
　(1)　未開の下段　自然発生的な両性の分業で、共有財産。
　(2)　未開の中段　社会的分業（第一の分業）、奴隷制度。
　(3)　未開の上段　手工業と農業の分離（第二の分業）、貧富の差。
　　諸氏族は人民に対する支配と圧迫の為の独立の機関
　(4)　文明期（第三の分業）商人、Ｇの発生。
　　氏族体制、分業とその結果として社会が階級に分裂する事により国家にとって代られた（富者と貧者、この対立は調和する事が出来ず益々激化しなければならないような社会）
エンゲルスの結論
　国家は一定の発展段階における社会の所産である。
レーニンの国家観
　階級調停の機関ではなく、支配階級の機関に過ぎない。
　国家は階級対立の調和し難い所から起ったものであり、その事の現われである。
社会主義国家の成行き
　スターリンの国家の機能
　　第一機能　前支配階級であったものに対する弾圧
　　第二機能　外部からの攻撃に対し社会を防御する事
　　第三機能　社会主義経済を育成し発展させ、社会主義的精神を涵養
国家の本質
　国家≠全体社会≠社会の構成員の凡てからなる社会
　国家＝社会の構成員の一部分が構成する機構にすぎない



四方 博
明治33(1900)年１月生れ。
大正12(1923)年東京帝国大学経済学部卒業。
昭和21(1946)年京城帝国大学教授を退職後、22年４月より愛知大学法経学部（旧制）教授に。
経済原論、経済史、経済通論、経済政策などを担当し、理事および経済学科長にも就任。
昭和24年より名古屋大学教授を務めた傍ら、愛知大学にも兼任教授として出講。

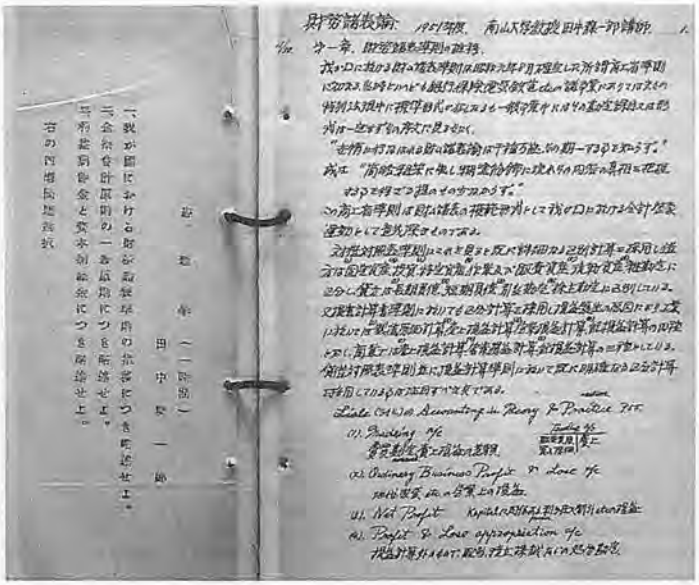


経済政策　1951年度　四方博教授

序説
　(1)　経済政策総論
　　本質論、方法論、政策史、政策学史
　(2)　経済政策各論
　　農業政策、交通政策、金融政策、工業政策、貿易政策 etc.
　1．経済政策の対象及び主体
　2．経済政策の成立
A．重商主義経済
Ⅰ．重商主義経済政策
　1．重商主義（Mercantilism）の発生
　2．重商主義（Mercantilism）の五大特色
　　(1)　富国強兵策
　　(2)　貿易政策
　　①　取引差額主義（Balance of Bargain System）
　　(イ)　輸出関係
　　(ロ)　輸入関係
　　③　Balance of Trade System
　　④　貿易政策に関連しての産業保護政策
　　(イ)　産業補助金
　　(ロ)　輸入禁止
　　(ハ)　輸出の禁止
　　(ニ)　技術者の輸入、外国への移民の禁止
　　(3)　特権の供与
　　(4)　人口増加政策
　　(5)　領土拡張の問題
　　①　王位継承に関係しての領土争奪
　　②　植民地争奪戦争
　　植民地政策
　　(イ)　住民の奴隷的労働による金銀鉱の採掘
　　(ロ)　特殊産物を獲得して欧州方面で販売
　　(ハ)　産業の開発
　　(ニ)　本国に於ける生産品の販売市場
　3．問題点
　　(1)　国家は賢者であるから人民に干渉する権利があるとする説
　　(2)　干渉する資格はないという説　自由放任主義
　　(3)　哲学的基礎を与える説　国家は超越的理想的権利がある

⋮

田中藤一郎
東京商科大学卒業後、名古屋経済専門学校教授を経て、南山大学教授を務めた傍ら、昭和26（1951）年より愛知大学法経学部（新制）講師に。
経理学、簿記学、財務諸表を担当。



財務諸表論　1951年度　南山大学教授　田中藤一郎講師

第一章　財務諸表準則の推移
我が国の財務諸表準則は昭和９年８月に確定した商工商準則に始まる。
その後、昭和16年11月、企劃院の財務諸表統一協議会において企劃院準則が発表された。この内容は、独乙株式法に類似している。

第二章　経済安定本部財務諸表準則の特質
企業会計原則の一般原則
①Ｂ／ＳおよびＰ／Ｌの真実性、②正規の Book-Keeping の原則、③資本取引と損益取引を明瞭に区分する剰余金の原則、④利害関係人に対する判断を誤らせない明瞭性の原則、⑤企業会計処理の原則および手続きを変更しない継続性の原則、⑥企業財政に不利な影響を及さない健全な会計処理を行う保守性の原則、⑦種々の目的のため異なる財務諸表を作成する必要がある場合、信頼しうる会計記録に基づき作成しなければならないものであって政策の考慮のために真実をゆがめてはならない単一性の原則。

第三章　減価償却
①定額法－直接法、間接法
②定率法－直接法、間接法
③生産高比例法－直接法、間接法

第四章　商法と企業会計原則
①会計帳簿、②貸借対照表および損益計算書、③財産目録および決算貸借対照表記帳価格、④会社の決算期と中間配当、⑤会社の監査役と證券取引法による公認会計士の監査、⑥計算処理の作成、⑦計算処理の確定、⑧財産の評価、⑨創業費、⑩自己株式、⑪繰延資産、⑫資本準備金、⑬臨時巨額の損失、⑭計算書類の附属明細書

第五章　財産評価
①原価主義、②時価主義、③低価主義

第六章　積立金
①法定積立金、②株主積立金、③役員賞与金、④配当平均積立金、⑤家屋新築積立金、⑥別途積立金、⑦繰越積立金

経理学　試験問題（一時間）　田中藤一郎

1．我が国における財務諸表準則の推移につき略述せよ。
2．企業会計原則の一般原則につき略述せよ。
3．利益剰余金と資本剰余金につき略述せよ。

一円一億
明治44(1911)年５月生れ。
昭和９(1934)年京都帝国大学法学部卒業。
昭和21(1946)年東亜同文書院大学助教授を退職後、22年５月より愛知大学法経学部（旧制）教授に。
憲法、法学を担当。

前　論

はしがき

制規は、それがそのままに行われるべきものであるとして作られたものであるが、事情の変化や、人々の立場の相異によって、人々は時には制規のままが行われることを欲しなくなることがある。このようなときには、制規は、しばしば枉げて解釈せられるものである。しかし制規の解釈は制規に則して客観的になされなければならない。

私が以下に述べる憲法論は、現在の日本の制規たる憲法、即わち「日本国憲法」の解釈を主とするものである。そしてそのためには、制規に則してこれをなそうと思う。

しかし他面、われわれは、現実の社会や国家をよりよい方向に向わしめることに興味と意義とを感ずるものであるから、制規たる憲法の解釈の外に、理想の憲法や立法政策への示唆をも提供し、また、現に抱いている社会意識としての憲法にも、必要に応じて触れたいと思う。そしてそのためには、明治憲法や諸国の憲法についても、述べなければならない。

右のような態度の下に、本書の論議を進めて行きたいと思う。

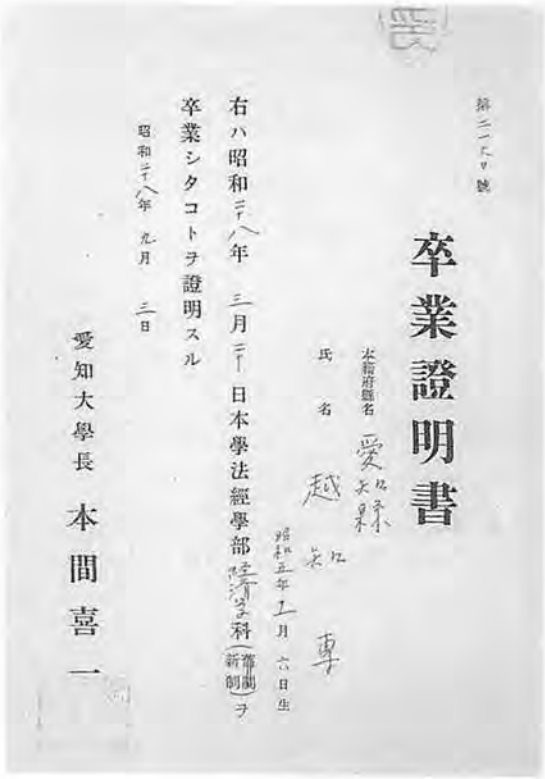
目　次

前　論
はしがき
第一章　国家、主権及び憲法
　第一節　国　家
　第二節　主　権
　第三節　憲　法
第二章　近代国家と諸種の憲法
　第一節　近代国家の成立と発展
　第二節　近代国家の諸憲法
　第三節　君主制度の変質過程
日本国憲法総論
第一章　日本国憲法制定の由来
　第一節　日本国憲法成立の由来
　第二節　日本国憲法制定の理由
第二章　日本国憲法概観
　第一節　日本国憲法の構造
　第二節　前　文
　第三節　日本国憲法の基本的性格
　第四節　国体の変革
　第五節　国　号
日本国憲法本論
第一章　天　皇
　第一節　天皇なるものの実体
　第二節　象徴たる資格における天皇
　第三節　象徴構成者たる資格における天皇
　第四節　個人たる資格における天皇
　第五節　摂　政
　第六節　皇　族
　第七節　余　論
第二章　戦争の放棄
附　録　日本国憲法

日本国憲法講義要領（第二分冊・完）

目　次

第三章　国民の権利及び義務
　第一節　国　民
　第第二一節項　国民の権利及び義務
　　第一項　基本的人権の概念
　　第二項　日本国憲法における国民の権利及び義務の根本的性格
　　第一目　権利義務の主体
　　第二目　自然権たる基本的人権の承認とその享有の保障及び不可侵の権利としての保障
　　第三目　基本的人権の善用及び尊重に対する国民及び国家の義務
　　第四目　基本的人権と公共の福祉
　　第五目　基本的人権の保障の方法
　　第六目　余　論
　第三節　個々の権利及び義務
　　第一項　総　説
　　第一目　自由権といわゆる生存権
　　第二目　憲法の列挙する諸種の基本的人権の類別
　　第二項　個々の権利
　　第一目　中核的基本的人権（人として平等に尊重される権利）
　　第二目　本来的基本的人権（生存及び生活に必要な権利）
　　第一　基礎的基本的人権（生存に必要な権利）
　　第二　拡充的基本的人権（生活に必要な権利）
　　第三目　手段的基本的人権
　　第一　政治的自由に関する権利
　　第二　生活資材の利用及び取得に関する権利
　　第三項　個々の義務
　　第一目　納税の義務
　　第二目　勤労の義務
　　第三目　教育の義務
第四章　国　会
　第一節　序　説
　　第一項　議会制度の意義と歴史
　　第二項　一院制と二院制
　第二節　国会の地位
　第三節　国会の構成
　　第一項　国会の二院制
　　第二項　両院相互の関係
　　第三項　議　員
　　第四項　選　挙
　第四節　国会の活動形態
　　第一項　国会の会
　　第二項　国会の内部体制
　　第三項　両院の議事法
　第五節　国会の権限
　第六節　法　律
第五章　内　閣
　第一節　序　説
　第二節　行政に関する一般原則
　第三節　内閣の性質
　第四節　内閣の組織
　第五節　内閣の権限
　第六節　内閣の責任
　第七節　内閣の総辞職
　第八節　各国務大臣及び各省大臣
第六章　司法と裁判の区別
　第一節　序　説
　第二節　司法機関
　第三節　最高裁判所
　第四節　下級裁判所
　第五節　法令審査権
　第六節　裁判官
　第七節　検察官
　第八節　裁判の手続
第七章　財　政
　第一節　財政の概念とその処理の一般的原則
　第二節　予　算
　第三節　収入及び支出
　第四節　決　算
　第五節　財政に関するその他の憲法規定
　第六節　会計検査院
第八章　地方自治
　第一節　序　説
　第二節　地方自治の規範
第九章　改　正
第十章　最高法規
第十一章　補　則



第二一六号

卒業證明書

本籍府縣名 愛知縣
氏名 越 紅 專
昭和五年一月六日生

右ハ昭和二十八年三月二十日本學法經學部經濟學科（常期・新制）ヲ卒業シタコトヲ證明スル

昭和二十八年九月三日

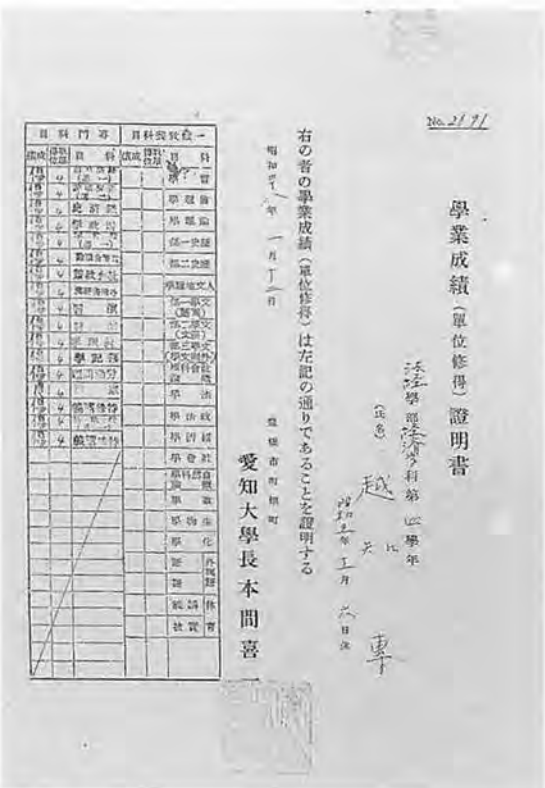
愛知大學長 本間喜一

AICHI UNIVERSITY
愛知大學
學生證

No. 224 身分證明書

現住所 豊橋市花田町新田77ノ2
氏名 越 紅 專
生年月日 昭 5年11月6日

上の者は本學 部 科 学年 学生であることを證明する
昭和27年4月1日
愛知大學長 本間喜一



No. 2171

學業成績（單位修得）證明書

法經學部 経済學科第四學年
（氏名） 越 紅 專
昭和五年一月六日生

右の者の學業成績（單位修得）は左記の通りであることを證明する

昭和二十八年一月十一日

豊橋市町新町
愛知大學長本間喜一

昭和26年度 期 成績通知書

第3學年 G組233番 氏名 越知 專

學科目	生物學	化學	數學	教育原理	倫理學	論理學	歴史學	公民理論	経済一部	経済二部	哲學一部	哲學二部	経済学説	経済史	財政学	統計学	金融論	金融史	社会政策	民法一	行政法一	憲法	国際法	国際経済史	英語	英語特講	体育
評點						80	75	85	100	70	80	88	90	68	97	90	80	85									
評語																											

II　世界の食糧危機を目前にして農業関係で地域に貢献する愛知大学
――東亜同文書院時代からの夢が叶えるか

次は、「世界の食糧危機を目前にして農業関係で地域に貢献する愛知大学」というテーマについてです。同文書院時代からの夢が叶えられるかどうか。これからが大事な、田原の皆さんと力を合わせてやりたいというお話です。愛知大学の前身は東亜同文書院大学です。東亜同文書院は元々日中の友好親善、そして教育育成ということが主眼で、田原の皆さんに同文書院関係については詳しい方がいますから今日は省きます。その同文書院に大正３年、農工科ができた。そして大正11年には廃止になった。農工科というのはどういう科目が必要かと言うと、教科内容は農業汎論、農産製造学、有機無機化学、応用動植物学、地質鉱物学、機械電気工学、製造科学といった科目をやっていた。だからあなた達が今田原で考えている農業大学院大学も、おそらくこれに該当する科目とそれに対する教授が必要ではないかと思います。

同文書院時代に三好四郎さんという教授がいた。その時分はまだ講師でしたが、研究調査員になりまして、昭和19年に東亜同文書院大学の学生の人達と中国の中央部南通あたりで、ジャポニカ（うるち米）とかインディカ（東南アジアの長くてパサパサした米）とかを研究して政府に報告した。そういう指導を、愛知大学の前身である東亜同文書院大学時代からやっていた。

１万坪の農場や飼育舎など
（愛知大学記念館内の再現模型）

２番目に、では新生愛知大学は農業とどういう関わりがあったかということです。箇条書きにしてありますけれども、その時に特に目立ったことといたしましては、創立時代の昭和21年に、農場を１万坪用意した。大橋さん１万坪と言うと農家は食べていけますか。

大橋　いけます。

越知　いけますか。なるほど。だいたいお百姓さんが何坪ぐらいの田畑を持っていたら生活できますか。

大橋　作る作物、経営内容によって変わりますが、今のお米ですと簡単に言いますと売値で１俵１万円。１反で８俵採れます。1,000平米で８万円の売上になります。

越知　愛知大学が３万７千坪の面積。その中の１万坪を農場に当てたんです。同時に300坪の母屋に飼育場を作り鶏や豚を飼った。農耕用シャベルや鍬を200丁ずつ、もっこ100本。企業として成り立つ規模かどうかは分かりませんが、そういうふうに本間先生は農業関係に意気込みを持っていた。なぜなら昭和21年に新設された愛知大学の設立趣意の趣旨の１つに、「そしてこれらは日本の国土計画に考慮すべき事項であり、愛知県及びその近県は日本有数の農産県にして、また近海及び沿海岸、特に三河湾、伊勢海、浜名湖などの海産物が豊富にして、特に農産物、水産物の加工研究に至って、将来日本の食糧対策上重要なる問題を提供しおり、これらの諸見地より本学は農学部、水産学部を設けてこれらの要望に即応せんと欲するものなり」というのがあります。だからその時分から、農産あるいは水産に関することを見通している。将来今のように世界の食糧危機がやってくるのではないかとまでは考えなかったかも知れないけれども、愛知県のそういった豊富な資源、それから加工技術を評価して、愛知大学として水産あるいは農業科をやりたいと考えていたという実績がある。そういう考えを発表したのかどうか分かりませんが、豊橋市が50万円、それか

設立認可申請の寄付金明細

ら富田實平（じっぺい）さん（新城市町並の人です。富田精機というおそらく農機具の会社じゃないかなと思います）が30万円、そして日本農産化学研究所が20万円、合計100万円、今の100億円でしょうか、そういうので愛知大学ができた。これを基金にして供託金にして愛知大学の申請認可をいただいた。

先ほど言ったように、もっと具体的に言えば財団法人愛知大学設立許可申請書では農耕鎌200本、農耕用シャベル200本、草刈鎌200本、天秤棒100本、もっこ類100本、そして校内敷地東北角に農場と家畜育場５棟建300坪を用意した。こういうような愛知大学の今までの経緯から考えても、これからの世界の食糧危機に当たって日本が、その中で東三河が、そして田原、豊橋がその食糧危機を回避するとまでは言わなくても、農業生産の自給率において、今は39％ですが、やはり50～70％にするのが国を守る根本にもなるわけです。そういうことからぜひ愛知大学に私は農業関連、環境、そういうものを含めた学科を作られてはいかがなものかという提案をしたい。特に本間先生はやはり行動を起こす人だった。あの人は学者でありながら実業家であった。殖産会社（建財株式会社）の社長をやっていて、そこを退職する時には大きい碁盤をもらった。そういうふうに本間さんは最高裁の事務総長、あるいは裁判官、そういうものだけでなくて、事業、殖産においても庶民の味方という物の考え方でありました。例えば私のところに下さった確か昭和34年の年賀状だと思いますけれども、「難しい世の中になった。アメリカの農家が日本の農家の首を締めるとは残念なことだ」と書かれています。大橋さんこの意味分かるでしょう。外米（カリフォルニア米）の輸入によって、日本の米作りをやっている人を潰していってしまう。そして国はどうしたかと言うと、補助金を与えて「田圃を作らないようにしてくれ」。こういうつまらない農業政策をやって無駄遣いをした。それよりも農家に自立できるような農業指導を国としてやればいい。これからの時代はおそらくそうなる。

例えば先ほど言ったマルクス経済学もケインズ経済学も今危機に瀕している。マルクス主義の崩壊といった本がたくさん出ています。社会主義の崩壊と資本主義の行方。そしてマルクス、ケインズ経済学の危機であると。もっと具体的に分かり易く言えば、今までの日本経済は公共事業による投資、需要と供給だけで事は済むと思っていた。需要があればどんどん供給すればいい。それが経済原則で有効需要の働きだと言ってケインズ経済学はやってきた。不景気になれば公共投資で金を出して橋を作り、道を作る。インフラは必要です。そういうものをやれば景気は良くなる。これがケインズ経済学の基本です。有効需要の発生です。それももう今は行き詰まった。ガソリン税はどうだ。そういうことでケインズ経済学も行き詰まっている。だから「ケインズさん、生きていたらどうしてくれる」と新聞に書いてある。「あなたが言うように公共投資を盛んにして有効需要を起こそうと思ったけれども、有効需要が起こせる程度ではない。足らなきゃ作りゃいいと言うけれども、作れないんですよ、農家なんかは。田圃だって一度やめたら何年かかるんですか。」そういうことは大橋さんや小川さんが詳しい。小川さんは農業大学出身ですからあとでどんどん質問してもらいたいと思います。そういうことを考えながら、これからの日本経済は世界の危機を日本自身でも守らなきゃならない。従って自給率を高めなきゃならない。そのためには地域の農業を大事にしなき

ゃいけないという時代になってくる。環境問題も含んでいる。環境が悪かったら農作物もできない。だから森林問題、水の問題、そういうものも含めた農業、環境、農業関連科目、そういう学科を愛知大学に設ければ地域に貢献できる。

文化への貢献は役割を果たした。なぜならば昭和21年に愛知大学ができた時、田原の人は知っていると思いますが小川さんは杉浦明平さんという人、知ってますよね。知らなかったら田原の人じゃない。渥美の有名な作家杉浦明平さんは本間先生と一高東大の先輩後輩の仲良しで、愛知大学ができた時杉浦さんは「東三河は文化不毛の地帯だ」という論文を発表した。そうしたら本間さんが逆襲した。「いやいや違う。田圃の中にトップモードの女性が立ったなんて冷やかしちゃいかん」。本間さんは例えの仕方がうまいんです。「そのうちに愛大の卒業生がボンボン出て、地元で県の職員があり、町の職員があり、魚屋さんがあり、床屋さんがあり、いろんな人達が地域の文化を高める草の根運動をやっている。そしてそのうち女子短大ができる。そうなればもう不毛のところじゃない。愛知大学ができたから東三河の文化は栄えるよ」と反論した。これはテープが残っていますから本間喜一コーナーで聞くことが出来ます。本間さんはそういうような物の考え方なんです。

愛知大学は農業の大切さというのをその時代からずっと伝統的に持っている。そこで実は前に愛知大学と田原さんと共同で農業科を作る話が煮えかかったことがあるんです。田原沿線に農場を作って実習をやるとか、そういう話が10年以上前にあったけれども、それが消えてなくなってしまった。田原を含めた東三河の農産物は日本一多かった。豊川用水のおかげで渥美のほうにどんどん水が行くようになった。電照菊がどんどんできる、キャベツができる。でき過ぎてトラクターで踏みつぶす。そこまで生産高がよくなった。それは豊川用水のおかげ。水のおかげ。その頃早川勝さんという人が第２回目の豊橋市長選に立候補して、マニュフェストで「東三河に農業大学を作る」というのをうたっている。早川さんにこの前「資料を貸してください」と言ったら、「いや、ちょっとあの時分の資料は」ということでした。私そのうち早川さんのところからお借りしてきますから。豊橋市もそういうことを考えた時がある。田原も愛知大学と一緒にそういうことをやろうと思った時がある。

そしていよいよ最終段階に入ります。今回はそういうことを踏まえながら話をすすめます。例えば国際コミュニケーション学部が名古屋へ行く、経済学部が行く、５千人が３千５百人に減る、そして新しい文理融合学科を作るんだったら、ぜひとも愛知大学に農業環境関係の学部を作っていただいたらどうか。そのためには田原の皆さんのご協力が必要です。そしていずれは道州制になる。それはもう藤田先生がお得意中の得意です。三遠南信地域を含めたそういう物の考え方をした時に、豊橋だけでなく東三河全地域に対する立派な社会貢献になるし、国際環境問題あるいは世界的な農業危機の問題も含めてやるべきことではないかなというのを、私の１つの考察ということでお話ししました。

今日田原の皆さんにおいで願ったのは、もう１つもっと具体的に話を考えた時に、例えば大橋さんも今石黒社長も考えていて、去年からそういう懸案を発表していますね。だけど今、担当する教授連のことも考えなければなりません。石黒社長が藤田先生とお話して、藤田先生にご協力をもらえれば教授連は理学博士とか水とか環境とか、詳しい先生がたくさんおりますから、そういう先生が集まれば農業大学院大学は難しい話じゃないですよと私は言ったんです。教授連も遠くから頼まなくても、地元の愛知大学に立派な先生がいらっしゃるからお願いしたらどうですかと言ったわけです。「遠くの親戚より近くの他人」という言葉があるでしょう。それと同じで、愛知大学に有名な大先生がいるから、そういうことでやったらどうか。そうすると石黒君のところでいわゆる農業大学院大学の問題もある程度考えられるでしょ

う。

それからもう１つ、では生徒はどういうふうに集めるかという問題もあるわけです。地域貢献という信念はいいにしても、やはり大義名分だけでは経営は成り立たない。収支バランスを考える、学生の募集を考える、就職先を考える、そういった包含的な経営を考えなければできるものではない。だから予算を計上するに当たっても、学生が何人で収入がいくら、人件費がいくらでコストがいくら、損益分岐点はどのくらいかというような計数的な把握がまず必要になりますね。それをやらなければ実際に動きはとれません。それはやるべきでしょう。では愛知大学に農業科、あるいは環境科ができて生徒が集まるか。今はやはりネーミングの時代ですから、「農業科」では集まらないでしょう。「お前は勉強ができんで農家になれ」などと言う人もいました。さらに、「だけど農業では食っていけないからトヨタ自動車に勤めたほうが収入が多いよ」と言われることもありました。そんな時代だったから容易に農業を辞めてしまう人が増えました。

そこで今田原がやっているように、農産物の付加価値を高める。例えば野菜にしても果物化する。フルーツトマトとか。そういうふうにすれば売れるわけです。買いますよ、うまかったら。コシヒカリだって中国の富裕層が食べている。日本人が食べないで。日本のトマトを中国人が買っている。日本の野菜を買っている。だったら日本ももっとどんどん生産量を増やしたらいい。今までの国の農業政策は間違いだったわけです。なぜかと言うとその時分の農業政策というのはGHQの指示に基づいて、農地を解放せよ、大地主は小作人に土地を与えろと、そういう政策でした。さあお百姓さんが土地をもらっても、トラクターも何もない。資産もなくて経営できるはずがない。その指導をせずにただ払い下げた。そこで三好先生は地域農業を考える。三好先生のおじいさんは大審院の院長をされていたすごい人です。三好先生のお兄さんは三好メリクロンの考案者、先駆者です。三好メリクロンをちょっと大橋さん簡単に説明してください。

大橋　メリクロンというのは１つの栽培手法で、成長点培養という技法でして、１つの細胞から同じ個体、同じ品種の物を試験管の中で大量に増殖させることができる技術を言います。

越知　そういう形でカーネーションでも蘭でも無菌の温室で作ってしまう。大量生産できるから細胞ラインの先駆者と言っている。田原でも温室でやっているのはそれに近い形ですか。そうではない。とにかく三好さんのお兄さんがそういうことをやっている。そういう関係もあるし、例えば安城デンパークとか、あるいは豊川の麻生田地区の栽培とか。田原でもいろいろ指導してもらっている。その名残があるかと思う。しかしその時分の農業政策というのは、国の政策として外国との交流を盛んにするため輸入をしなきゃならない。だから日本の農家が成り立たない。「補助金を出すからやめてくれ」という時代だったけれども、もうそういう時代ではなくなった。グローバルな地球上で物を考えなきゃならないから、適材適地のところで物を生産する。だから田原、渥美、東三河のそういった特性を生かしながら、これからはいわゆる自立できる農家を育てる。愛知県に10の農業科があるんですよね。昔は農業学科。例えばここで言うと渥美農業学校。田口農林学校。新城農蚕学校。作手農林学校。東三河に５つも６つもある。それがどんどん農業政策のおかげで衰退しまして、勉強の好きではない人は普通科じゃなくて農業科へ入る。そういう人が愛知大学へ行ったら愛大のレベルが下がるんじゃないかと心配する人がいる。偏差値いくつぐらいの人が推薦入学で入ったら着いていけるのか。進路指導の先生もそう言われる。実はこの近くの田原に渥美農高というのがあって、ここは推薦入学で国立の岐阜大学の農学部に推薦が受けられる。山本さん、今までに何人受けましたか。

山本　６、７年前まで１人だけ。今は全然だめ。

越知　それはやっぱり学力低下して着いていけ

ないということですか。今は何でだめになってしまったのでしょう。そういうことを考えると、では愛知大学に新学部を作った時に学力不足の学生を受け入れることもあるかもしれない。しかしそれは工夫したらどうだと進路指導の先生に言ったんです。例えば愛知大学に愛知県の10校ある農業科の生徒達の１人ずつ、２人ずつでも推薦してもらって、アフターケア、例えば英数国だけを特別に指導して、大学が必要とする学力のレベルまで上げていくように努力したらどうだろうか。やる気があったら学生は伸びますから。今の樹研工業の社長じゃないけれども、「どんな人も環境とチャンスを与えれば、素晴らしい能力を発揮する」というのを松浦君が実証している。だから農業科でももしそうなればそういうような方法・テクニックによって能力の向上は見込めるでしょう。

生徒数は。今大橋さん何クラス考えていましたか、大学院大学は。

大橋　１クラス40人です。

越知　40人では採算が合わないですね、先生を雇ったら。授業料対人件費の問題。その場合独自でやったらきついけれども、愛知大学の教授にお願いして、愛知大学と連携してやれば経費は節減できますね。そういうふうにして愛知大学に新学部ができた時にやる手もある。では愛知大学の卒業生はどこへ行くか。就職はどうかという問題は、今田原でやる農業大学院大学に行く。あるいはそのまま企業としての農業、自立できる農業、そういう経営のできる企業家を育てる愛知大学と、またそれを教育する大学院大学とが連携プレーをすれば、そこで道は開けるのではないか。今までこうやってお話をたびたび数人でやると、そういう疑問が出るわけです。生徒はどうするのかとか。その生徒の就職先はどうなのかとか。そういう場合には今私が言ったような考えもありますよと。だからやっぱり論議をすることによって反対意見もあるでしょう。賛成意見もあるでしょう。新しい意見もあるでしょう。創造性の意見もあるでしょう。そういうものを突き合わせて皆さんでいい考えを作る、農業自給率を上げる。東海農政局長さんの話を、スライドを使って聞きました。これは大橋さんと小川さんだけですか、行かれたのは。自給率の問題をけっこう皆さん真剣に聞いていましたよね。だからあの時本当は私質問をして、「農業大学院大学をどう思いますか」と言いたかった。大橋さんが言うかと思った。せっかく農政局長がいるから、見込みはどうかと。そういう知恵を一度農政局長に会いに行って勉強しましょう、大橋さん。そういうふうにすれば先は開けるのではないかと思います。特に今回の北海道洞爺湖サミットは食糧危機を前提に考えていますよね。世界の食糧危機。日本の果たす役割は何かというような問題。例えば自給率は小麦13％、大豆５％、トウモロコシ０％。あるいは肉１kg作るのに穀物がどれだけ要りますか。例えば豚１頭飼うのに。

大橋　約６、７倍。

越知　６、７倍も豚に食べさせる。その豚肉をうまいうまいと食っちゃって飽食の時代、メタボリックの時代になっている。そういうような世界的な問題がある。トウモロコシだってそうでしょう。ガソリンが無くなったから今度はトウモロコシが無くなる。穀物が無くなる。だから家畜は飼えない。昔は家畜は人間が残した残飯を食べて肉になってくれたわけです。だから昔の家は、家の中に家畜の部屋があった。牛なんていうのはちゃんと台所の横に部屋があった。私はその時代に生きてるから知っているけれども。家畜というのは人間の残した食べ物を食べていた。今は人間の食う物を食べる。今度は米を食わす。麦を食わす。昔の人が生きていたらもったいないと言う。人間の食う物を何で動物に食わして肉にして、１頭が６倍から７倍穀物を食べる。それじゃあ足りなくなりますよ。これは本当にもったいない話ですよね。そういう話はあまり具体的に言わないでしょう。本当は言わなきゃ分からない。昔のように野菜を食べていれば通じがいいし、あまり太らない。そういうようなことも含めて世界の食糧危機とい

う問題に対処する必要がある。

だいたいここで説明は終わりまして、最後は「日本に農業が生きられるか」。地球は世界を養えるのか。今養えない。だから北海道の洞爺湖サミットではその問題が取り上げられる。環境を悪くする。地球が悪くなる。東松君はそういう写真を撮っているから売れるんですよ。日本が買うんじゃなくて世界の美術館で東松君の写真が高値で売れる。そういう記録写真を撮っている。世界を救えるか、地球を救えるか、そういう問題。本来の農業の道はどうあるべきか。そしてそれに対する水の問題。水が無かったらできません。環境を良くする。そのために森林を良くしなきゃいかん。今は東三河が一体となって、１ｔの水に対して１円を寄付してNPOがフォレスト問題を考えようじゃないかと。栗原先生が先月フランスへ行った。水１杯500円だったので驚いたという。水はタダじゃないということを証明している。水をきれいにするにはフォレスト（森林）の問題がある。こういう問題は藤田先生がお得意のところです。こちらの役員をやっておられるから。そういう問題を話して農業関連を愛知大学に設けたらどうかという話で終わらせていただきます。

大島　どうもありがとうございました。熱弁尽きるところがなく、大変重要な問題を提起されたと思います。いちいち私がまとめることはありませんが、要するに新しい愛大の再編成、笹島のほうへ行く、豊橋が空く、そのあとに新学部を作らなければならないということが現実の問題としてあるわけです。その問題を考えていく上で、愛大の前身校と言われる東亜同文書院にも実は農工科というものがあったと。それから愛大の草創期にも農学部あるいは水産学部という構想があり、現実に校舎の中に大農園があった。愛大はそういう問題に今まで全然無関係ではなく、むしろ非常に深い関係があった、ということをお話しになられました。新学部では文理融合学部的なものが言われており、田原市においても農業大学院大学が構想されている。別々にできるのは構わないけれども、これはやはり何らかの協力・連携というものがないとおそらく有効ではないだろう。そういう意味で愛大の中に農業や環境のことを考える、またそういう学生を育てる学部を作ったらどうか。だいたいそういうお話であったと思います。

研究会の様子

Ⅲ　意見交換篇

５月15日は愛知大学豊橋校舎研究館で「愛知大学創成期からもう一つの原点を考察する――それを生かせるかどうか」というテーマで約１時間半、そのあと１時間質疑応答や意見の交換があった。出席したメンバーは愛知大学東亜同文書院大学記念センター長の藤田佳久地理学博士、中日大辞典編纂主幹で中国社会について詳しい今泉潤太郎名誉教授、愛知大学史について研究している大島隆雄経済学博士（当日の司会者）、一橋大学大学院卒の葛谷登准教授、黍嶋久好三遠南信地域連携センター上席研究員など学内10人と、外部からは田原で計画中の「農業大学院大学」の設立準備をしているイシグロ農材㈱社長室長の大橋進吉氏（東京農大卒）や田原市の農政課長小川金一氏（東京農大卒）、田原市教育委員会前田和宏課長、同山本五夫主管などが参加した。

その内での各々の質疑や意見をまとめてみる。

今泉　愛知大学に農業に関する学部はなかったが、元をたどれば系譜として、脈々と続いている。その基本は実学、虚学（純理論などを研究）とかいうのではなく、実際の用に便ずるための学問に徹するのが、東亜同文書院であった。

実地調査など実学的な流れから言うと、愛知大学建学の精神でもある。

佃　愛知大学は創設当初、農学部と水産学部の構想を持っていて、昭和21年８月１日設立認可申請にもあり、農学部設置準備委員会設置が評議会で決められている。

大橋　全国一の生産量を誇るこの地域であっても、最近では農業が恒常的に儲からない産業、若い人たちから見れば魅力のないものになって、後継者がどんどんいなくなっている。日本の農業の将来に非常に危機感を覚えている。

「農学栄えて農業滅ぶ」「稲のことは百姓に聞け」。専門的な学問だけの知識の習得に走ってしまうと、現場の農業とかけ離れていく。

農業学の専門家というと、やはり田原で何十年もやってこられたお百姓さん、これは正に農業学博士といえるだろう。

農学部と言いますのは、バイオとか遺伝子組み換えといった、科学の最先端の部分や、農業経営と言われる、限りなく経営学に近い部分、あるいは農業哲学という考え方の部分と、非常に幅が広い。文理融合と言われる学問書きがあるとしたら、農学はまさしく文理融合でないと成り立たないのではないか。

藤田　イギリスの大学にいたとき、地理学と農学と両方に籍を置いていた。農学部の方は世界中から学生を集めている。渥美半島は世界の農業の先端であるから、世界から人を集めたら良いのではないか。そうしたら面白い。

農学部のデパートメントの名前は例えば「フードエンジニアリング」にしてみてはどうか。そうすれば「アグリカルチャー」でなく、全くイメージが変わってくる。その中で２つに分かれて、生産部門ともう１つは景観（ランドスケープ）部門がある。東京農大にはランドスケープがある。イギリスの場合は造園とは言わない。景観構成、つまり素晴らしい農村景観というものを一方で維持しながら食糧をどういうふうに増産するか、ということがイギリスとしては伝統的な考え方である。だからイギリスの農村を美しく整備するということを国民全体が期待している。

大橋　農学というのは非常に幅の広いところがあって、環境問題、それと食べ物の生産にまで及ぶ。食糧を生産出来る産業は唯一農業しかない。カルチャー（アグリカルチャー）と付いているので、何かちょっと文化みたいなところになるが、食べ物（フード）という切り口はまさに今の「食の安心・安全」という問題から地球温暖化に関する環境問題まで含まれている。今の時代は日本的イメージの農業と出すより、フード（食糧）のキーワードで出した方がインパクトが強いのではないか。

今泉　学生は18歳、大学院は20何歳、そういうのをやめて、60～65歳の人をも対象とするよう

に思い切って切り換えるべきではないか。農学部を勉強する定員の対象を半分は若い人、半分は健康であって新しいことをやってみたいという人、仮に年金が崩壊してもまだ食べていかなければならない、第２の人生を考えなければという学生も集まるのではないだろうか。中国などからこれからも来るのではないだろうか。ここで育てて向こうに行ったら日本向けの農作物を作ってもらう。

大橋　実際に、愛知県にもあるが、農業試験場に付随している公立の農業大学校では、本科は定員割れだが、別科（公開講座）の方は定年帰農組の人々で溢れかえっているという状況である。

いみじくも日本との関係だが、農業というものは小農と言われる地域と、大陸型の大農といわれる地域、更に中規模のヨーロッパ型に分かれると言われているが、小農文化圏の中では日本の農業技術が最も進んでいるので、こういったことを留学生が日本で学んで母国で農業技術を発展させる。そのための人材育成は日本でしかできないことだと考えている。一案だが将来的には３分の１くらいはそういう留学生の方に入っていただき、そういう方を支援していただけるような組織になればという希望を持っている。

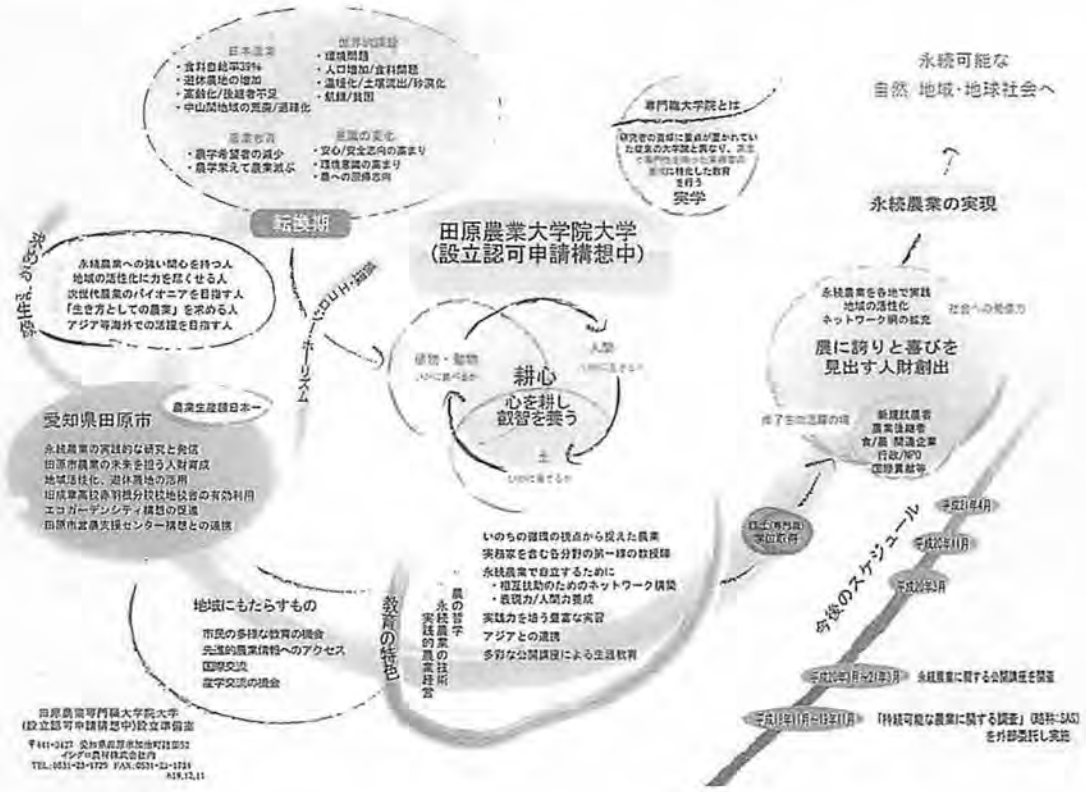
私が卒業した東京農業大学は、私たちの時代は世界に１校だけの農業単科大学と自慢していたが、農学部として残っているものの、農学科と畜産学科だけで、あとは生物資源というふうに名前を変えている。

今は、農学部だと学生が集まらない。非常に不思議な名前が多い。何を専攻するのか分からない。

藤田　今の日本では荒廃地がけっこうたくさんあるから、問題はそういうのをうまく使えるかどうか。政府の資金が導入できるような体制があると、比較的そこへ来れば安心して帰農できるというか、営農に入っていける。農地法を変えて、何かそういう仕組みを作る必要がある。

例えば、特区指定をしたらどうか。国にとってもプラスになる。説得力は充分ある。そういう形でうまく誘導できるような仕組みを一番重要視して作っていかないとうまくいかない。

優良農地でさえ放置されている。渥美半島にもあるはずだ。国の出方を待っていたらなかなか動



かないから、農業大学だけでそれを付加すればよい。そうしたらものすごく注目されるんじゃないか。それをやりたい人が集まってくるんじゃないか。そこができれば自分はそういう権利がもらえるんだという。すごく素晴らしい、ステキな授業だと思う。

大橋　時限的にできないだろうか。時限的に10年間は、農業大学に無料で貸してやるという特区を認めさせたら、10年たったらまた10年間延長というように。

藤田　そこの一番難しいところをやはりクリアーしないとなかなか集まらない。今特区が流行しているから、それを大学院につけた特区などできないだろうか。

小川　田原には耕作放棄地（荒廃地）が450ヘクタールある。そのまま放置していたら生産性も上がらないし、今後の食糧等の問題もあり、環境問題と農業とを絡めて、耕作放棄地を解消する一つの手段として菜の花を植えれば、観光客も呼びこめるというものだ。

緑化推進、公園緑地、たとえば沿道花壇の花いっぱい運動という形でどうだろう。渥美半島全体が農業特区になって、これはうまくいくんじゃないだろうか。「菜の花でバイオ技術を」ということだ。

葛谷　経済学部にいますが、農業経済という分野については研究していません。ただ一つ私のゼミの生徒に、渥美農業高校を卒業した学生がいて、豊橋の特産物のウズラをやっているが、「あなたはお百姓さんを継ぐ気がありますか」と聞いたら、今はウズラの飼料であるトウモロコシがたいへん高くなって、ウズラを飼えない状況だと。なぜかと言うと、バイオエタノールを作るため、トウモロコシが買い占められてしまって、飼料が買えない。だから自分には農業を継ぐ気はとてもないと言っている。

昨年の暮れに、綜合郷土研究所で「ふるさと」というシンポジウムがあったが、やはり日本人の心にとって農村は、ふるさとの原型だと言える。ふるさとを守っていくことは、いろんな面で生き方すべてに大事なことだと考えるので、今後ふるさとの農業を守っていくという観点から、農業経済を充実させていくことが大切だと思う。

黍嶋　私は山中の出身なので、渥美半島だけの農業だけでなく、山間地帯の冷えきった農業も考えたい。

三遠南信地域連携センターで３年ほど前、飯田から豊橋・浜松までの56市町村の中学生１万人への意識調査で、その子供たちが、その地域で自分たちの将来をどのように見ているかということを聞いた時、将来の職業選択の中に「農」と「林」については全くなかった。なぜかというと、親の姿を見ているから嫌だと、単純にそういう話が出てしまう。いくら行政が政策的にいろいろしても、農と林はやはりだめなのかと思う時がある。

例えば、直径10センチ、長さ４メートルのヒノキ・杉の木が１本100円均一の店で買える。15年かけて４メートルの材木が100円という世界。

そんな時子供たちに、林業や農業をやれるということをどのように伝えていくのかという現実がある。

地域の中の農業、地域の中の林業というものをどのように育て、守っていくか。行政でもなければ、農協さんでもない。やはり大学が持つか、いかに地域が大学を利用していくかという仕掛けを作らないと、何となく大学と地域とが分かれてしまう。

地域側がいかに大学を使えるか、大学がいかに地域の壁を取り払っていくかということをやっていかないと、形はできても実態がたぶん浮かんでこないのではないかということである。

私の村では、早稲田大学とプロジェクトを組んで、過疎地域をどうするか、特区が出来ないかということをやってみた。「その時お前たちは何で勝負するんだ」というと「農と林」だという。猫の額みたいなところでも農が成り立つ仕組みを作らないと消えてなくなる。それから先がうまく展開できない。そういう面でも百姓とか、「農業ができる人」を作るという理念はすごいと思うが、やはり、もう少し現実的なものを見ていくことのできる人も併せて作っていただく仕掛けとして、農業大学・農業大学院大学に期待したいと思う。

参考資料①　研究会開催にあたって作成、配布されたビラ

東亜同文書院・愛知大学史
研究会のお知らせ

テーマ：「愛知大学創成期から
もう一つの原点を考察する
――それを生かせるかどうか――」

報告者：越知 専（東亜同文書院大学記念センター客員研究員）

日　時：2008年５月15日(木)
午後１時30分～３時30分

場　所：豊橋校舎研究館　１階第２会議室

お問い合せ先：東亜同文書院大学記念センター事務室
（豊橋校舎大学記念館１階、内線1817）または
大学史事務室
（豊橋校舎大学記念館１階、内線1490）まで

参考資料②　研究会・講演会レジュメ

愛知大学創成期からもう一つの原点を考察する――それを生かせるかどうか――
［写真と資料で読む］

愛知大学写真研究会名誉会長・越知　専
（東亜同文書院大学記念センター客員研究員）

はじめに

愛知大学の名古屋・笹島進出に伴う再編成にあたって豊橋キャンパスの新学部はどうあるべきか、愛知大学の歴史を創成期から振り返りながら、現在の世界的な環境問題、食糧問題も視野に入れて考察する。

Ⅰ）(1)　愛知大学創成期に学んだ学生は今。私の選んだ超著名人「愛大三本松」
　(2)　彼らが学んだ法経学部の15科目の教授陣とその講義内容
（口頭および写真・資料参照）

Ⅱ）世界の食糧危機を目前にして農業問題で地域に貢献する愛知大学
――東亜同文書院時代からの夢が叶えるか――

(1)　東亜同文書院農工科の新設と廃止

1901（明治34）年　東亜同文書院創立。
1914（大正３）年　農工科新設。
1922（大正11）年　農工科廃止。
1939（昭和14）年　東亜同文書院、大学に昇格。

農工科設立の主旨は、「中国に産出する各種の農鉱産物を、科学知識を応用し研究してこれを原料とする製造、精製のために必要な人材を養成する」ことにある。

教科内容は農業関係においても、「農業汎論、農産製造学、有機無機化学、応用動植物学、地質鉱物学、機械・電気工学、製造化学」などがあった。

そして、農工科の運営には施設・研究に莫大な経費を必要とし、第一次世界大戦後の不況と円価の暴落によって、書院の財政が極度に逼迫したので、大正９年４月、同科の廃止を決定した。このため学生のスト騒ぎを引き起したが、大正11年６月の19期生の卒業を待って廃止された。

そのうち、三好四郎東亜同文書院大学講師、研究調査委員は、1944（昭和19）年東亜同文書院大学の学生たちと、南通、常熟、無錫地方の農村実態調査を行い、粳稲（ヤポニカ種）は籾稲（インデカ種）に比して多く灌漑労力を必要とするため、多重層的な土地所有関係に喘ぐ小作農民がこの粳稲耕作を敬遠する大きな要因となっていることを論じ、政府の推奨にもかかわらず当時の中国小作農には耕作困難と報告しているようだ。

(2)　新設愛知大学の創立と農業との係わり

1946（昭和21）年11月　愛知大学新設（東亜同文書院大学の継承としての）。
愛知大学設立認可申請。創立費基金100万円。
1946（昭和21）年11月　三好四郎氏、文学部助教授兼農事指導になる。
1947（昭和22）年10月　三好四郎氏、愛知大学付属農場主事となる。
1947（昭和22）年９月　安形要太朗氏（新城農蚕学校卒）、農耕関係の嘱託委嘱。昭和23年８月、農場主任となる。
1948（昭和23）年６月　「農業問題研究会」発足。三好四郎氏指導教授、東三河をはじめ全国各地

	の農地実態調査を始める（詳細は別項の通り）。
1949(昭和24)年４月	学制変更により、三好四郎氏法経学部教授となる。
1951(昭和26)年11月	「戦後日本農業の実態分析」、「日本デンマーク地帯の経済的分析」刊行。
1962(昭和37)年	「農業問題研究会」消滅。
1963(昭和38)年10月	西尾市、幡豆地区農家実態調査。
1968(昭和43)年11月	静岡県大浜砂丘地帯メロン栽培農家実態調査。
1970(昭和45)年２月	安形要太朗氏退職。
1972(昭和47)年３月	三好四郎氏退職。

昭和21年に新設された愛知大学の設立趣旨の１つに、「地方的経済ノ発展ニ寄与尽力スベキハ文化方面ニ劣ラザル重要性ヲ感ズルモノニシテ、コレガ為メ将来農学部及水産専門部ヲモ設置セント欲スルモノナリ、此等ハ日本ノ国土計画上ニモ考慮スベキ事項ナルト共ニ此種施設ハ当該地方人ノ最モ要望スル所ナリ。愛知県及其近県ハ日本有数ノ農産県ニシテ又近海及沿岸特ニ三河湾、伊勢海、浜名湖等ノ海産物ハ豊富ニシテ、特ニ農産物、水産物ノ加工研究ニ至ツテ将来日本ノ食料対策上重要ナル問題ヲ提供シ居リ、此等ノ諸見地ヨリ本学ハ農学部、水産専門部ヲ設ケテ此等ノ要望ニ即応セント欲スルモノナリ。」とある。

その証として、愛知大学は豊橋市50万円、日本農産化学研究所20万円、新城市の富田實平氏30万円の出費による合計100万円の基金を土台として設立された。

もっと具体的に見れば、財団法人愛知大学寄附行為許可申請書を借りれば、農耕用鍬類200個、農耕用シャベル類200個、草刈鎌200個、天秤棒100本、モッコ類100個、そして構内敷地東北角地に農場と、家畜飼場５棟建て300坪まで用意したのである。

『愛知大学五十年史　通史編』に見られる如く、「愛知大学が豊橋におかれたことは偶然ではあるが、日本の大学というものが従来東京や大阪・京都に偏在し、終戦後日本はもっと学問・文化が地方に分散したほうがよいという考えが強くなったために、中部地方が法文系大学の空白地帯ということで、ここに大学をおくことに意義を見出し現在の地点を選んだのである」。（同書14頁）

※東愛知新聞５月８日付および東日新聞５月10日付参照。

むすび

愛知大学創成期（食糧難）という時代を考えると、愛知大学と農業との関係が特に浮き彫りにされてくるような気がする。そこで、愛知大学新学部増設に合わせて農業関連について考察した。

まず、愛知大学の前身の東亜同文書院時代、期間は短かったが農工科が存在したのであり、愛知大学設立と同時に同大学には附属農場ができ、農業政策担当の三好四郎氏（元東亜同文書院大学講師）は、本間喜一先生の指示のもと、新城高等農蚕学校（現　新城高校）出身の安形要太朗氏を主任に委嘱した。安形氏は農耕関係を担当するとともに、現実の食糧難や三好氏の農業政策にも寄与することになった。

愛知大学設立の各種認可申請書（『愛知大学五十年史　資料編』に収録）の文末にも、「将来の計画」として「新たに農学部を設置する」とあり、そのために化学実験室等も用意されていて、審査した文部省も「異色である」と述べている。しかし、その計画は実現しなかった。

豊橋市では早川勝市長（愛知大学理事・昭和41年卒）の平成12年の２期目の選挙のマニフェストで、東三河への農業大学の設置がうたわれた。また最近では、田原市に農業大学院大学を設置する動きがある。

愛知大学にも理学博士が数人いるほか、水や、農業や、環境についての権威者も大勢いる。地域に貢献する愛知大学として、農業関連学部設置の実現を一考する必要がないであろうか。

2008年（平成20年）5月8日（木曜日）　東愛知新聞

愛知大学豊橋校舎に、「農業関係学部」新設はどうか。

愛知大学東亜同文書院大学研究センター客員研究員　越知専

越知専氏

今年1月、「愛大、名古屋駅前に進出」「さきしま新校舎決定」など、新聞・テレビなどで大々的に報道された。

「豊橋校舎は学生1500人減」とか、「愛大移転、再編、看板損失、街に痛手」などの見出し、1500人減少で豊橋地方にどんな影響が出るのだろうかと市民は苦慮しているのが実状である。愛知大学当局は、「豊橋に2学部新設、文理融合学部を検討し、空洞化を避ける」とし「地元意見も聞きながら決めたい」としている。

昭和21年、愛知大学は、地元の人たちの要望と応援を得て、旧制愛知大学として発足。その10年後、豊橋文化協会の神野太郎氏は「愛知大学はいつまでも豊橋を照らす燈火であって下さい」と毛筆の題彩文を与え、"文化的不毛地帯"の豊橋地方を文化的に飛躍させたいと「文化賞」を創立者本間喜一氏に授与された。

以来、豊橋の中心街の南から、豊橋技術科学大学と共に"文化の明かり"を照らし、今では北からも豊橋創造大学が光をあて続けている。

それは、愛知大学創立以来60有余年、軍都から文化の町への貢献度としても、広く市民の期待に沿ったものである。

しかし、愛知大学の「学部大移動」についての市民の不安はぬぐい切れず、今年3月の豊橋市議会では「2012年4月に、経済学部や国際コミニュケーション学部が名古屋へ移転するが、本市の認識と今後の対応について聞きたい」（市議会だより№263より）と地元市議が質問した。市側は、「現在5000人いる学生のうち、約1500人程度の減少が予想される。公共交通機関や、商店、また学術的、文化的にも影響があると考え、移転に伴う影響に配慮を願い、新設の学部についても、新しい型の活性化が生まれて来るよう要望している」と答弁している。

こうした中で、愛知大学では新学部として「文理融合型学部」の創設を進めるようだ。

そこで、愛知大学OB（昭和28年卒業）の一員として、愚案ではあるが提案してみたい。

（1）農業関係学部はどうか。

今、世界の食糧は危機に向かっている。このところ「地球は世界を養えるか」とか「日本の農業は生き残れるか」「本来農業への道」はどうあるべき等々多くの本が出版されている。

世界の穀物在庫率は、新興国での需要増加や、バイオ燃料への利用などの影響で、急激に減少しているという。

世界の食糧危機を防止するため、世界銀行のR・ゼーリック総裁は本年のサミット議長国である日本に、その対応策を促している。

一方、日本においても、穀物自給率は小麦13%、大豆5%、とうもろこしにいたっては0%（平成18年度調べ、2カロリーベース）と記している。

（2）環境関連学部はどうか。

EUのバローゾ委員長が「日本として、EUは世界的重要課題に協力関与し続けるべきだ」と、先ほどの「クローズアップ現代」NHKの対談で述べているし、温暖化や排気ガス、食品製品の安全基準などについても日本の協力を求めているようだ。

筆者は、（1）の農業関連学部について詳しく述べたい。

（A）愛知大学の前身、明治34（1901）年創立の東亜同文書院では、大正3（1914）年9月から、政治科、商務科に加えて、農工科が新設された。

農業汎論、農産製造学、有機無機化学、応用動植物学、地質鉱学、製造化学などの教科が取り入れられていた。

また、昭和18（1943）年、東亜同文書院調査研究員だった三好四郎講師（実兄は「ミヨシメリクロン」の考案者、無菌カーネーションの量産化に成功したバイオ栽培の先駆者）は、同文書院の学生達と、中国南通や常熟、無錫地方の農村実態調査を行ない、粳稲（ヤポニカ種）粘稲（インディカ種）の報告を政府に提出している。

（B）昭和21（1946）年創立の「愛知大学設立認可申請書」の中で、将来の計画として次のように記してある。

「愛知県及ビ其近県ハ日本有数の農産県ニシテ、又近海及ビ沿岸特ニ三河湾、伊勢海、浜名湖等ノ海産物ハ豊富ニシテ、特に農産物水産物ノ加工研究ニ至ツテ将来日本ノ食糧対策上重要ナル問題ヲ提供シテ居リ此等ノ諸見地・リ本学ハ農学部、水産専門部ヲ設ケテ比等ノ要望ニ即応セント欲スルモノナリ」とある。

その証としてかどうかは知らないが、愛知大学創立に当たって、日本農産化学研究所から20万円、新城市町並の冨田実平氏から30万円、豊橋市から50万円の寄附金を頂いて設立の基金としたのである。

それらを具体的にあらわした事実として、本間喜一名誉学長は、東亜日文書院時代からの、三好四郎助教授を、愛知大学付属農場（愛知大学敷地総面積3万7900坪のうち農場は1万坪）主事に当たらせ、新城農蚕学校卒業の安形要太郎氏を農場主任に据えた。

また、「農耕用鍬類200ケ、農耕用シャベル2000ケ、草刈鎌類200ケ、天平棒100本、モッコ類100ケ」を用意、農場内に家畜飼育場300坪5棟建も計画したのである。

一方、「農業問題研究会」の指導教授となった三好四郎教授は、全国の農業実態調査を行い、50本以上の実態調査報告書論文などを発している。

以上の経過から考えても、世界の食糧危機を目前にして、愛知大学の特徴や、愛知大学創立の趣旨に照らし合わせても、地域に貢献できる最大のチャンスではないだろうか。

あす5月9日は、本間名誉学長の命日に当たる。

愛知大学とサツマイモとの関係

本間喜一名誉学長㊧と安形要太郎農場主任

東日新聞 2008年(平成20年) 第3種郵便物認可 5月10日(土)

寄稿

愛大に「農業」「環境」学科を

愛知大学の名古屋笹島移転が報じられてから、もう半年が過ぎた。有識者や校区の自治会長さんから、いろいろと尋ねられる。「大部分の学科が行くそうだね」「残るのは何ですか？」。

豊橋鉄道渥美線の、愛大学生30％ぐらいの通学が減少するし、近隣の学生アパートの激減も予想されるとして、マンションのオーナーは嘆いている。

「愛大ＯＢ」として胸を張って歩いているように見えるのか、それとも愛知大学に客員研究員として勤務しているから聞かれるのであろうか。ところが筆者には、その情報を詳しく知るすべはない。一般市民と同じ程度、新聞などで報道されたことぐらいの知識しかない。しかし、愛知大学に対する希望と大きな夢は持っている。

愛知大学は、創立時の昭和21年、豊橋市から50万円、日本農産化学研究所から20万円、新城市町並の富田実平氏から30万円の寄付を頂き、それを基金（100万円）とし、出来た大学である。

その上、愛知大学設立の認可申請書（愛知大学50年諸資料編）によれば、「新たに農学部を設置する」と記してある。

本間喜一名誉学長は、新城農蚕学校卒の安形要太朗氏（明治36年生まれ、八名郡富岡村出身）を農耕担当に委嘱、愛知大学附属農場の指導には三好四郎助教授（実兄は、パイオ栽培の先駆者、「ミヨシメリクロン」という無菌カーネーションの量産化に成功、園芸会社の経営者）をあてた。

三好助教授は、大学講義では農業政策を担当、各地の実態調査を行い、安形氏は、附属農場で農耕関係を担当した。

校庭東北には300坪（990平方㍍）の家畜飼場や、農耕用鍬（くわ）類200個、農耕用シャベル類200個、天秤（びん）棒100本、モッコ類100個も用意した、と、財団法人愛知大学寄附行為許可申請書に記してある。

愛知大学の前身である東亜同文書院大学においては、大正の後半、商務科とは別に農工科が設置された時代もある。

昭和18年、19年、東亜同文書院の調査研究委員の三好四郎講師は、東亜同文書院の学生たちとともに、中国の農村実態調査を行い、粳稲（ヤポニカ種）、籾稲（インディカ種）の研究を政府に報告している。

こうしてみれば、愛知大学は、東亜同文書院時代から、農業についても関係は深いものがあったようだ。

戦後の食糧難の時代から、飽食、メタボリック時代、〝世界に広がる食糧危機の時代〟しのびよる食糧危機はすぐそこまでやって来た。

戦後の食糧自給率60％が今では39％までに下がった。

北海道サミットでも、世界銀行ゼーリック総裁はサミット議長国・日本に対し、食糧危機についての対策を促し、ＥＵバローゾ委員長は、温暖化や、食品・製品の安全とを「日本とＥＵは世界的重要課題として協力関与し続けるべき」という。

そうした対応に対し、日本は環境農業問題は避けては通れない。

とくに東三河・豊橋は日本での農業生産高日本一を誇れるものがある。「持続可能な農業」を育てる意味においても、また農業とのかかわりが深かった愛知大学に、「文理融合学科」を新設するならば、ぜひとも、「農業」や「環境」を設け、「愛知大学設立趣旨」の1つの目的を達成することが、地域の貢献につながるものであると思う。

（愛知大学ＯＢ・越知専）

左、本間喜一名誉学長、右が農業主事安形要太朗氏